

ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報**21**

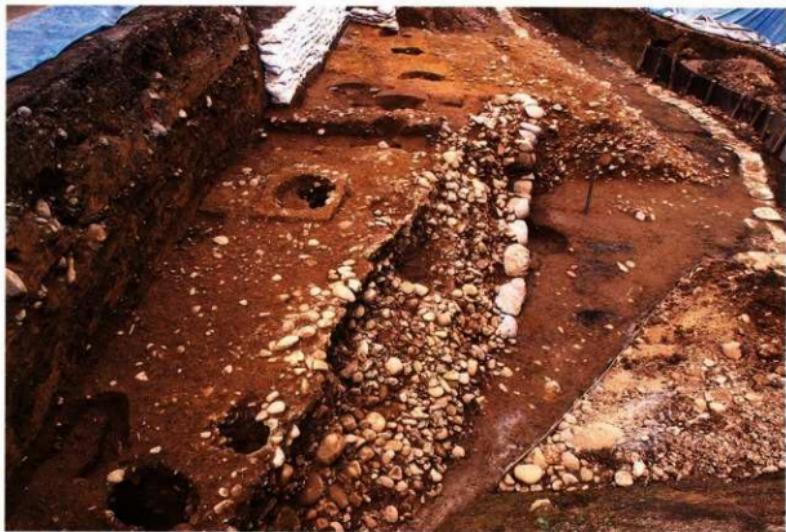
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点の調査
芦ノ口遺跡第6次調査

東北大学埋蔵文化財調査室
2007

東北大学埋蔵文化財調査年報21

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点の調査
芦ノ口遺跡第6次調査

東北大学埋蔵文化財調査室
2007



1. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点全景（南から）



2. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点石垣（東から）

序

東北大学構内には、仙台城跡二の丸地区をはじめとして、多くの埋蔵文化財包蔵地が知られている。これらの東北大学構内の埋蔵文化財包蔵地における施設整備事業などに際して、組織的に対処する必要から、昭和58年に埋蔵文化財調査委員会が設置された。調査委員会は、平成6年に埋蔵文化財調査研究センターに改組され、東北大学構内での埋蔵文化財調査および研究を行うとともに、資料の保管と活用にあたってきた。

国立大学法人化以降、東北大学においても、さまざまな機構改革が進められている。その一環として、本年度（平成18年度）から、センターは特定事業組織としての埋蔵文化財調査室に改組されることとなった。新たに設置された埋蔵文化財調査室の業務内容やスタッフは、従来のセンターを引き継いでいる。今後とも当調査室の活動への、変わらぬご理解、御協力を御願いする次第です。

本書は、平成15年度に東北大学構内で実施した、施設整備に伴う埋蔵文化財調査や、それに関わる整理作業、研究活動などの事業概要をとりまとめたものである。当年度に実施した発掘調査は、川内北キャンパスの仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区で1件、富沢キャンパスの芦ノ口遺跡で1件の、2件であった。調査面積はさほど大きなものではなかったが、大学施設が立地している遺跡を正確に理解するための、貴重な成果が得られている。本書で報告されるデータが、広く活用されていくことを望むものです。

調査の実施から報告書の刊行に至るまで、施設部を始め、大学内外の関係者および関係機関には、多くの御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

東北大学埋蔵文化財調査室
室長 阿子島香

例 言

1. 本年報は、東北大學構内において、東北大學埋蔵文化財調査研究センターが2003年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。
 2. 報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点 (BK 9)
本調査 2003年7月14日～9月17日 藤沢敦・柴田（旧姓京野）恵子・高木暢亮
芦ノ口遺跡第6次調査 (TM 6)
本調査 2004年3月25日～3月30日 藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮
 3. 調査・整理作業は、東北大學埋蔵文化財調査室を行った。
 4. 本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が担当した。
 5. 本文は、藤沢敦が執筆した。
- 英文要旨については、藤沢敦が作成し、阿子島香が校訂した。
6. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。
 - 仙台市教育委員会、東北大學考古学研究室
 7. 出上遺物・調査記録は、東北大學埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡 例

1. 方位は真北に統一してある。
2. 図1と図2は、それぞれ国土地理院作成の、2万5千分の1地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、1万分の1地形図「青葉山」を使用した。
3. 川内地区的仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷地区にあたる区域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の1）を使用した。
4. 国上座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。
5. 遺物の実測図および写真的縮尺は、それぞれに示した。
6. 遺構の断面図中で、縦はアミをかけて示した。
7. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、『東北大學埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報1という形で略記した。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（2003年度）

委員長 センター長（文学研究科 教授）	阿子島 香能
委員 川内地区協議会協議員（国際文化研究科 教授）	米山 親博
青森山地区協議会協議員（生命科学研究所 教授）	上川 和進
星陵地区協議会協議員（医学系研究科 教授）	里見 孝雄
片平地区協議会協議員（金属材料研究所 教授）	後藤 隆修
文学研究科 教授	須藤 雄一
文学研究科 教授	今泉 隆雄
文学研究科 教授	大藤 修
東北アジア研究センター 教授	入間田 宣夫
理学研究科 教授	藤巻 宏和
工学研究科 教授	飯淵 康一
総合学術博物館 教授	柳田 俊雄
施設部 部長	新保 幸一
幹事 施設部企画課長	佐々木 力

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会（2003年度）

委員長 センター長（文学研究科 教授）	阿子島 香能
委員 文学研究科 教授	須藤 雄一
文学研究科 教授	今泉 隆雄
文学研究科 教授	大藤 修
東北アジア研究センター 教授	入間田 宣夫
理学研究科 教授	藤巻 宏和
工学研究科 教授	飯淵 康一
総合学術博物館 教授	柳田 俊雄
調査研究員（文学研究科 助手）	藤沢 敦子
調査研究員（文学研究科 助手）	京野 恵子
調査研究員（文学研究科 助手）	高木暢亮
施設部 企画課長	佐々木 力

目 次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 2003年度（平成15年度）事業の概要	1
1.はじめに	1
2.運営委員会・専門委員会	1
3.埋蔵文化財調査の概要	4
(1)川内地区の調査	4
(2)富沢地区の調査	10
4.遺物整理作業	10
5.保存処理事業	10
6.資料保管状況	11
7.研究活動	13
第Ⅱ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点(BK9)の調査	16
1.仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区的	
立地と歴史	16
2.調査経緯	17
(1)2002年度までの調査	17
(2)調査地点の位置	17
(3)調査の方法と経過	17
3.基本層序と時期区分	20
(1)基本層序	20
(2)変遷段階の設定と推定期	24
4.検出遺構	25
(1)Ⅰ期の遺構	25
(2)Ⅱ期の遺構	26
(3)Ⅲ期の遺構	33
5.出土遺物	33
(1)縄文土器・上築器	33
(2)磁器・陶器	34
(3)土師質上器・瓦質上器	
軟質施釉土器・上製品	34
(4)瓦	35
(5)金属製品	35
(6)その他の遺物	35
6.まとめ	36
第Ⅲ章 富沢芦ノ口遺跡第6次調査(TM6)	43
1.芦ノ口遺跡の立地と歴史	43
2.調査経緯	43
(1)2002年度までの調査	43
(2)調査地点の位置	44
(3)調査の方法と経過	44
3.検出遺構	44

引用・参考文献

英文要旨

写真図版

図 目 次

図1 東北大学と周辺の遺跡	2	図13 武家屋敷地区第9地点遺構配置図(1)	28
図2 仙台城と二の丸の位置	3	図14 武家屋敷地区第9地点遺構配置図(2)	29
図3 仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点	5	図15 武家屋敷地区第9地点	
図4 青葉山地区調査地点	7	検出遺構平面図(1)	30
図5 富沢地区調査地点	9	図16 武家屋敷地区第9地点	
図6 収蔵遺物量の推移	12	検出遺構平面図(2)	31
図7 収蔵庫全景	12	図17 武家屋敷地区第9地点検出遺構断面図	32
図8 武家屋敷地区第9地点調査区の位置	18	図18 武家屋敷地区第9地点出土陶器	37
図9 武家屋敷地区第9地点基本層序模式図	21	図19 武家屋敷地区第9地点出土磁器・土器	38
図10 武家屋敷地区第9地点		図20 武家屋敷地区第9地点出土瓦・古錢	39
基本層序断面図(1)	21	図21 芦ノ口遺跡第6次調査区の位置	45
図11 武家屋敷地区第9地点		図22 芦ノ口遺跡第6次調査遺構配置図	46
基本層序断面図(2)	22	図23 芦ノ口遺跡第6次調査検出遺構	
図12 武家屋敷地区第9地点		平面図・断面図	47
基本層序断面図(3)	23	図24 芦ノ口遺跡第6次調査出土土師器	50

表 目 次

表1 2003年度調査概要表	4	表7 武家屋敷地区第9地点出土磁器観察表	42
表2 武家屋敷地区第9地点出土磁器集計表	40	表8 武家屋敷地区第9地点出土陶器観察表	42
表3 武家屋敷地区第9地点出土陶器集計表	40	表9 武家屋敷地区第9地点出土土師質土器・瓦質土器・軟質施釉土器観察表	42
表4 武家屋敷地区第9地点出土		表10 武家屋敷地区第9地点出土瓦観察表	42
土器・その他の遺物集計表	41	表11 武家屋敷地区第9地点出土古錢観察表	42
表5 武家屋敷地区第9地点出土瓦集計表	41		
表6 武家屋敷地区第9地点出土			
純文土器・土師器観察表	41		

図 版 目 次

図版1 武家屋敷地区第9地点	
全景・Ⅲ期の遺構	59
図版2 武家屋敷地区第9地点全景（I・II期）	60
図版3 武家屋敷地区第9地点	
基本層セクション（1）	61
図版4 武家屋敷地区第9地点	
基本層セクション（2）	62
図版5 武家屋敷地区第9地点	
I・II期の遺構（1）	63
図版6 武家屋敷地区第9地点	
I・II期の遺構（2）	64
図版7 武家屋敷地区第9地点	
I・II期の遺構（3）	65
図版8 武家屋敷地区第9地点	
I・II期の遺構（4）	66
図版9 武家屋敷地区第9地点出土遺物（1）	67
図版10 武家屋敷地区第9地点出土遺物（2）	68
図版11 芦ノ口遺跡第6次調査	
全景・検出遺構（1）	69
図版12 芦ノ口遺跡第6次調査検出遺構（2）	70
図版13 芦ノ口遺跡第6次調査出土土師器	71

第Ⅰ章 2003年度（平成15年度）事業の概要

1. はじめに

東北大には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（図1）。特に川内地区は、ほぼ全域が近世の仙台城跡二の丸地区と二の丸北方の武家屋敷地区にあたっている（図2）。東北大構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、1983年度に東北大埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。2006年度からは、大学法人化に伴う組織・定員見直しの結果、特定業務組織として、埋蔵文化財調査室に改組され現在にいたっている。

2003年度においても、川内地区や宮沢地区において調査が行われ、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査成果および同年度のセンターの研究教育活動など、各種事業についてまとめたものである。

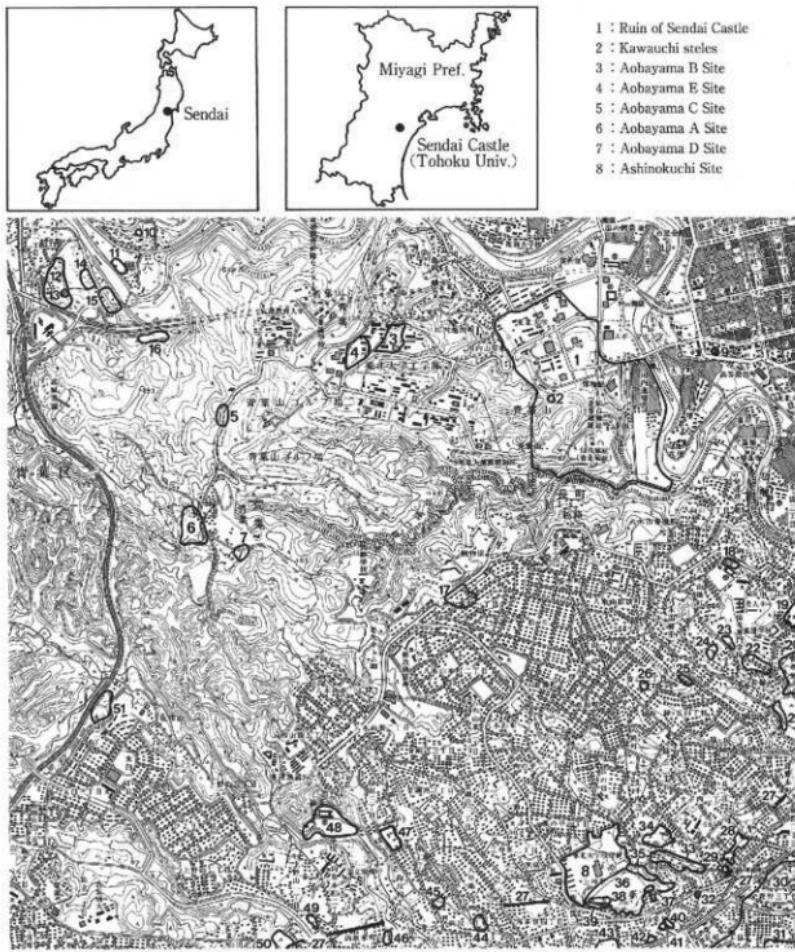
2. 運営委員会・専門委員会

東北大埋蔵文化財調査研究センターでは、センターの運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的問題を審議する専門委員会が設置されており、両委員会の審議とともに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に1回開催し、そこで年間の事業予定・予算等を審議し、調査に関わる具体的な事項は、専門委員会をその都度開催して審議することとしている。

2003年度（平成15年度）は、運営委員会は2回、専門委員会は1回開催した。それぞれの開催月日・議事内容は以下の通りである。

埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

- | | | |
|-------|------|---|
| 5月15日 | 審議事項 | (1) 平成15年度埋蔵文化財調査計画について
(2) 平成15年度センター運営費について
(3) 平成15年度整理作業計画について
(4) 法人化への対応について
(5) 平成15年度非常勤講師の委嘱について
(6) その他 |
| | 報告事項 | (1) 平成14年度埋蔵文化財調査結果について
(2) 平成14年度センター運営経費決算について
(3) 平成14年度整理作業について
(4) 調査研究員の全学枠定員について
(5) その他
1) 東北大キャンパス移転統合計画について
2) 本学構内に所在する遺跡登録の変更について |
| 3月8日 | 審議事項 | (1) 法人化に伴う埋蔵文化財調査研究センター規定の改正について
(2) 埋蔵文化財調査研究センターの中期目標・中期計画について
(3) その他 |
| | 報告事項 | (1) 法人化に伴う文化財保護法の扱いの変更について
(2) その他 |



- 1 : Ruin of Sendai Castle
 2 : Kawauchi steles
 3 : Aobayama B Site
 4 : Aobayama E Site
 5 : Aobayama C Site
 6 : Aobayama A Site
 7 : Aobayama D Site
 8 : Ashinokuchi Site
- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 青葉山遺跡E地点 4 : 青葉山遺跡F地点 5 : 青葉山遺跡C地点 6 : 青葉山遺跡A地点
 7 : 青葉山遺跡D地点 8 : 芦ノ口遺跡 9 : 片平仙台大神宮の板碑 10 : 郷六大日如来の碑 11 : 茅岡城跡 12 : 郷六城跡
 13 : 郷六建武碑 14 : 沼田遺跡 15 : 郷六御殿跡 16 : 郷六遺跡 17 : 枝ヶ岡遺跡 18 : 向山高麗遺跡 19 : 萩ヶ丘遺跡
 20 : 茂ヶ崎城跡 21 : ニツ沢横穴墓群 22 : 茂ヶ岡B遺跡 23 : 八木山緑町遺跡 24 : ニツ沢遺跡 25 : 青山二丁目遺跡
 26 : 青山二丁目B遺跡 27 : 紗土手(廻土手) 28 : 砂押屋敷遺跡 29 : 砂押古墳 30 : 富沢遺跡 31 : 泉崎遺跡
 32 : 金洗沢古墳 33 : 土手内塚跡 34 : 土手内横穴墓群 35 : 土手内横穴墓群 36 : 三神峯遺跡 37 : 金山窪跡 38 : 三神峯古墳群
 39 : 富沢窪跡 40 : 蔴町東遺跡 41 : 蔴町古墳 42 : 原東遺跡 43 : 原遺跡 44 : 八幡遺跡 45 : 後田遺跡 46 : 可憲跡
 47 : 神池山遺跡 48 : 御堂平遺跡 49 : 上野山遺跡 50 : 北前遺跡 51 : 佐保山東遺跡

図1 東北大学と周辺の遺跡
Fig.1 Archaeological sites and Tohoku University

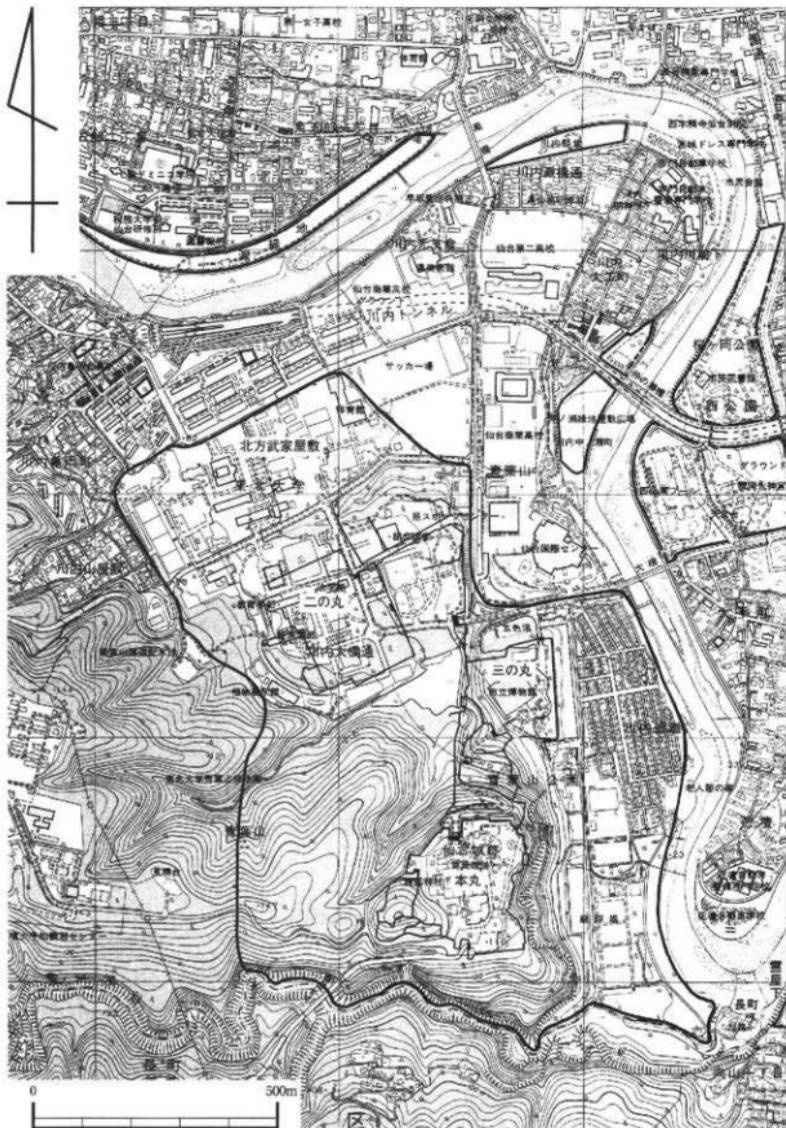


図2 仙台城と二の丸の位置
Fig.2 Distribution of Sendai Castle

埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

- 5月15日 審議事項 (1) 平成15年度埋蔵文化財調査計画について
 (2) 平成15年度整理作業計画について
 (3) その他

- 報告事項 (1) 平成14年度埋蔵文化財調査結果について
 (2) 平成14年度整理作業について
 (3) その他

3月8日に開催した運営委員会は、翌年度当初からの大学法人化を控え、法人化に伴う規定改正や中期目標・中期計画について審議したものである。また法人化に伴い、文化財保護法の適用法令が、国等の機関から一般法人扱いとなり変更になることなどの報告を行い、学内に周知徹底することなどを確認したものである。

3. 埋蔵文化財調査の概要

2003年度は、川内地区と富沢地区において、本調査2件、立会調査5件の、合計7件の調査を実施した。(表1)。青葉山地区については、当年度の調査はなかったので、これまでの発掘調査個所を示した図4を示しておくに留める。

(1) 川内地区的調査

川内地区では、本調査1件と立会調査4件を実施した(図3)。

本調査を実施したのは、音楽・舞踏系課外活動施設(川内ホール)新館に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点(BK9)の調査である。これについては、本年報の第II章において報告する。

川内南地区での立会調査は、1件であった。

受水槽新設に伴う調査(2003-3)で、調査場所は文系4学部などが置かれている平垣面から、南西側の丘陵を20mほど登った場所である。周知の遺跡の範囲外ではあったが、遺跡範囲にすぐ隣接すること、大型水槽の設置で基礎掘削が深くなることから、念のため立会調査を実施した。調査の結果、盛土が3m以上の深さに及んでおり、沢状の地形であった場所を、近代以降に大規模に盛上したものと判明した。遺物も発見されなかった。

川内北地区での立会調査は3件であった。

川内石積よう壁改修工事に伴う調査(2003-1)は、体育館東側のグランドとの間にある石垣が崩壊し、それを改修する工事に伴うものである。グランドとの段差は、本来は段丘崖による段差であると考えられるが、現在は全体に石垣が築かれている。石垣表面からの観察では、仙台城跡の本丸北側石垣で確認されている変遷にあてはめると(我妻仁2000)、Ⅲ期石垣と同様の積み方となっている。しかし、本丸Ⅲ期石垣と異なる点も見られる。

表1 2003年度調査概要表
 Tab.1 Excavations on the campus in the fiscal year 2003

調査の種類	調査地點(略号)	原因	調査期間	面積	時期
本調査	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点(BK9)	音楽・舞踏系課外活動施設新館	7/14~9/17	363.5	近世
	芦ノ口遺跡第6次調査(TM6)	屋外排水管布設	3/25~3/30	24.5	古墳
立会調査	川内北地区川内体育館東側	川内石積よう壁改修	6/19, 25	—	—
	原子核理学研究施設研究棟南側	総合学术博物館標本倉庫新館	7/17	—	—
	川内南地区北西端	川内宿地受木橋新設	11/10, 20	—	—
	川内北地区講義棟A棟北側	学務部講義棟改修電気設備	2/27	—	—
	川内北地区東北アジア研究棟南側	東北アジア民族学研究室新設	3/27	—	—

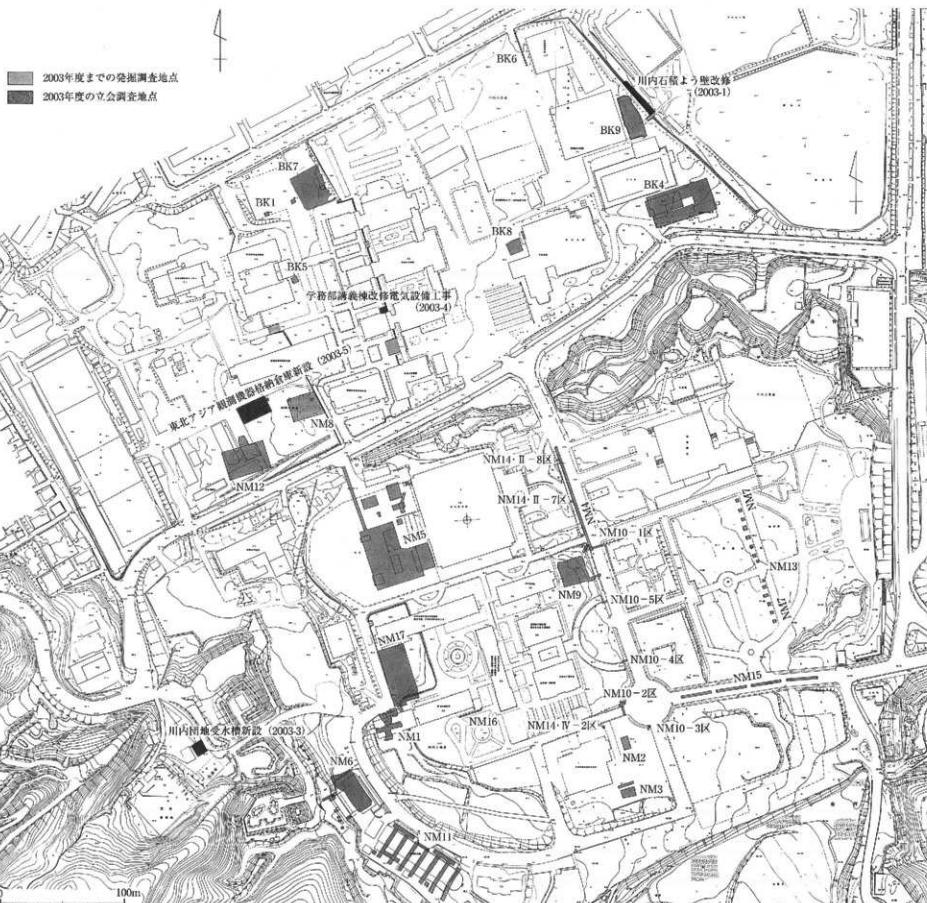


図3 仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点
Fig.3 Location of excavations until 2003 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

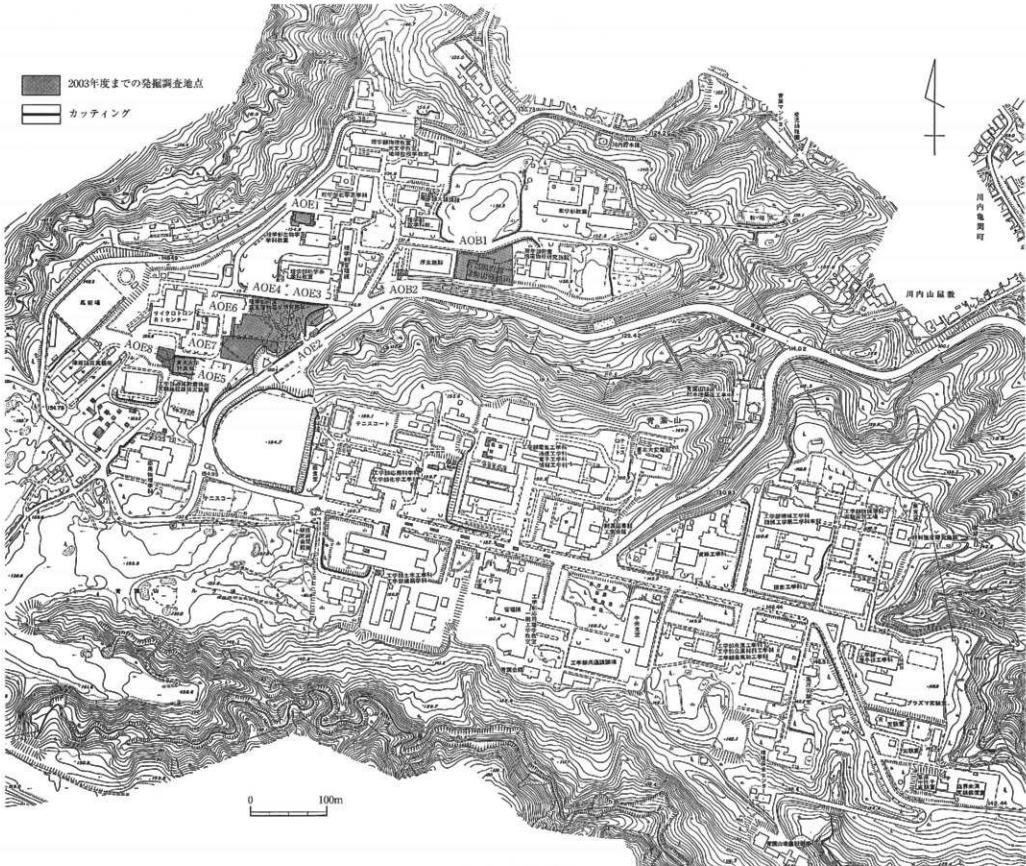


図4 青葉山地区調査地点
Fig.4 Location of excavations at Aobayama campus

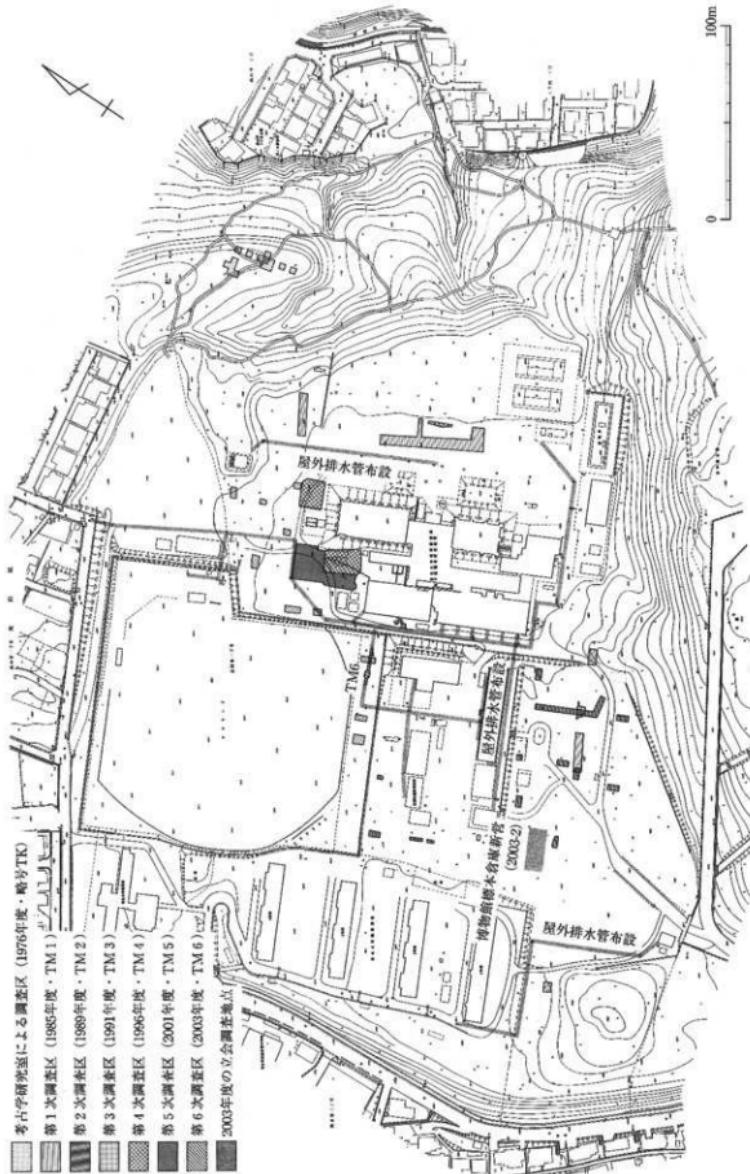


図5 富沢地区調査地点
Fig.5 Location of excavations at Tomizawa campus (TM I.e. Tomizawa Ashinokuchi site)

本丸の三重石垣は、石垣前面の形をほぼ長方形に整えた切り石による整層積で、横目地が通る。隅角の石は算木状に積み上げられ、角石1石あたり、2から3段の横目地が通る。グランド脇の石垣では、角石1石あたり横目地は1段となり、横目地がそのまま角石につながっている点が、本丸石垣とは異なっている。石材を見ると、グランド脇の石垣では、少數はあるが、凝灰岩が使われている。確実に江戸時代に通る石垣では、凝灰岩が使用されている例は知られていない。また、江戸時代の城下絵図に、石垣の存在を示すものが見当たらない。以上の点から、この石垣は、近代以降に構築された可能性が高いものと判断し、改修工事の際に立会調査を行うこととした。石垣の崩壊部分を除去する際の観察で、背面にモルタルが用いられていることが確認された。また石垣を撤去したさらに下層に、江戸時代の地表面と推定される斜面が確認され、この斜面に盛土を行った上で石垣を構築していることが判明した。以上の点から、この石垣は明治時代以降に築かれたものであることが確実となつた。

講義棟改修電気設備工事に伴う調査（2003-4）は、A講義棟のすぐ北側の場所である。工事箇所がA講義棟に隣接し、既設建物建設の際に掘削されている可能性が高いため、立会調査とした。工事による掘削は、近代以降の新しい地層の範囲内におさまり、遺物も出土しなかった。

東北アジア研究センターの観測機格納庫新設に伴う調査（2003-5）を行ったのは、川内北合同研究棟の南西側の場所である。簡易な構造の格納庫で、基礎掘削も深さ40cm程度と浅いため、立会調査とした。掘削は現代の盛土の範囲内に収まり、遺物も出土しなかった。

（2）富沢地区の調査

富沢地区では、本調査1件、立会調査1件を実施した（図5）。

本調査を実施したのは屋外排水管布設に伴う、芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）である。工事範囲は広範囲に及んでおり、工事実施にあわせて順次立会調査を実施した。立会調査の結果、一部で遺構・遺物が発見されたため、その部分は本調査を実施したものである。これについては、本年報の第Ⅲ章において報告する。

立会調査を実施したのは、総合学術博物館標本倉庫新館に伴う調査（2003-2）で、原子核理学研究施設研究棟の南西側の場所である。軽量鉄骨造で、基礎掘削が50cm程度と浅いため、立会調査とした。表土直下に地山面が確認されたが、既に削平を受けた場所と考えられ、遺構・遺物は発見されなかった。

4. 遺物整理作業

2000年度に調査を実施した仙台城跡二の丸第17地点の整理作業は、当初は2002年度までに終了させる計画であった。しかし、整理作業予算が当初目論見通り確保できなかったことや、他の整理作業との関係もあり、2003年度まで作業を継続することに変更した。当年度も作業を継続することで、整理作業はおむね終了させることができた。しかし、法人化移行を翌年度に控え、整理作業予算の取り扱いと方法や予算額の確定が遅れたことなどから、2000年度調査分を取りまとめた調査年報18の刊行は、翌年度に先送りすることとなった。そのため当年度は、調査年報は刊行していない。

これ以外に、2001年度に調査した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点、2002年度に調査した青葉山E遺跡第7次調査の整理作業も実施した。

5. 保存処理事業

東北大學埋蔵文化財調査研究センターでは、仙台城跡の二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区から出土した、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と銅製品については、当センターで保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール（ラクチ

トル）を利用した保存処理を行っている（年報16）。木製品の保存処理は、2002年度までに、1990年代に実施した調査分の処理が終了している。2003年度は、仙台城跡二の丸第17地点（2000年度調査・NM17）の出土木製品の保存処理を開始した。

保存処理は、2000年度に建設したプレハブ平屋建の保存処理作業室において作業を実施している（年報19第1分冊）。この作業室には、小型の簡易型ドラフトチャンバーを設置して使用していた。翌年度の国立大学法人化を控え、全学的に実験室における局所排気装置の整備が進められ、当センターの保存処理作業室にも新たにドラフトチャンバーを設置することになった。

6. 資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス#32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには入っていない。当センターの前身である東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、図6である。

2003年度末時点で、当センターで保管している遺物総量は2,733箱となった。前年度からは310箱の減少となっている。前年度より増加したのは、当年度に調査を実施した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点の出土遺物が7箱と、芦ノ口遺跡第6次調査が1箱の、計8箱である。予算の関係等で報告書刊行は翌年度となったが、2003年度で仙台城跡二の丸第17地点の遺物整理作業が終了した。二の丸第17地点の出土遺物は、整理前の段階では751箱、整理後は収納を工夫することで536箱となった。これにより、箱数は215箱減少させることができた。また、1985～1989年度にかけて調査した仙台城跡二の丸第5地点の出土遺物については、攪乱や近代の層序から出土した瓦も全て採集していた。これらについては、本年度に処分したため、103箱が減少した。よって、増加分8箱、減少分318箱となり、差し引き310箱の減少となった。

仙台城跡二の丸第17地点の遺物整理が終了したことで、2000年度調査分まで整理作業が終了したこととなる。箱数では、2,242箱が整理・報告済みで、未整理は491箱となる。全体の箱数の内、整理・報告済みのものの比率は82.0%となった。

当センターが保管している上記の出土遺物は、報告書に掲載した資料については、見学などの利用の便を図るためにセンター内の収蔵室に保管し、それ以外の資料については別に収蔵場所を確保し保管してきた。1998年以降は、片平地区の旧標本館の一部、4室分、合計155m²を収蔵場所として利用してきた。2003年度になって、法人化時に新たに必要な役員室等の確保が現在の事務局庁舎では困難であること、翌年度当初から開設される法科大学院等の教室を確保する必要があることから、旧標本館を全面的に改修し、これらの用途に充てることとなった。そのため、旧標本館を資料などの収蔵場所としている、当センターを含む関係部局には、代替施設を充當して移動することとなった。当センターの収蔵資料は、片平地区構内の2000年度に建設した保存処理室の南側に、収蔵庫専用のプレハブを建設して保管することとなった。新たに建設された収蔵庫は、軽量鉄骨造2階建で、面積は1階・2階とも101m²、あわせて202m²である（図7）。遺物の増加を見込んで、従来使用していた面積より、3割ほど広い面積を確保した。1階には重量のあるものを収蔵することとし、瓦と大型の遺物を収蔵している。2階には陶磁器類や乾燥状態の木製品など、比較的軽い遺物を収蔵するようにした。

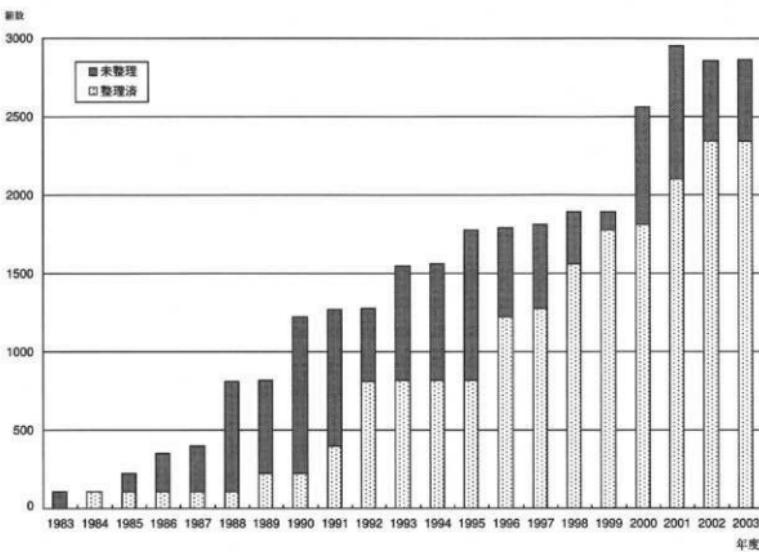


図6 収蔵遺物量の推移
Fig.6 Graph showing transition of amount of artifact in storage (showed by number of case)



図7 収蔵庫全景
Fig.7 View of the repository

7. 研究活動

(1) 受託研究・共同研究等

センターでは、東北大学大学院工学研究科の量子エネルギー工学専攻量子ビーム工学講座からの提案を受け、1999年度から同講座と共同して、PIXE (Particle Induced X-ray Emission 粒子線励起X線分析) による、考古資料の材質分析を行ってきた。今年度は、研究成果を下記の学会で発表した。

日本文化財科学会第20回大会（ポスターセッション） 2003年5月17・18日 於：島根県県民会館

「大気サブミリPIXEカメラによる仙台城二の丸跡出土漆器の分析」藤沢敦・松山成男ほか

2003年度は、新たに下記の受託研究1件を実施した。

・受託者：岩手県山田町長 沼崎喜一（担当：教育委員会社会教育課文化係）

研究課題：房の沢古墳群出土鉄製品の保存科学についての研究

研究目的：山田町房の沢古墳群から出土した鉄製品を恒久的に保存するため、有効な保存処理方法（脱塩）の研究をおこなう。

研究経費：1,425,900円

岩手県山田町の房の沢古墳群は、8世紀を中心に築造された末期古墳で、豊富な鉄製品が出土している。1996・1997年に発掘調査され、出土鉄製品は、1997年に保存処理が施されていた。しかし、脱塩処理が不充分であったため、その後の経過観察によって進行性の腐食生成物が確認され、再処理が必要な状態となっていた。これらの鉄製品には、木質・繊維・漆など有機質が多数付着して遺存しており、通常の方法では再処理が困難である。そのため、東北芸術工科大学の松井敏也講師・手代木美徳氏と協力しつつ、同古墳群出土鉄製品の内の5点の鉄刀について、再処理方法を検討し再処理を実践することを、当センターが受託研究として担当することになった。この受託研究は2ヶ年にわたって実施する予定で、その初年度として、脱塩方法の検討と実施を当年度の研究課題とした。

具体的な作業工程の概略は、次のとおりである。

1) 現状調査

資料表面には、漆膜や木質、繊維等の有機質が多数付着しており、それらの位置と新たに発生した腐食生成物の位置等を実体顕微鏡等を用いて観察・記録するとともに、写真撮影を行った。

2) 再クリーニング

新たに発生した腐食生成物、前回処理の際に除去できていないさび等を、実体顕微鏡下でデザインカッター、グラウンドー、エアブラシを用いて除去した。エアブラシも実体顕微鏡下で作業できるよう、特製の作業箱を作成した。また、充填されていた樹脂の下でも腐食生成物が確認されたため、可能な限り充填樹脂を除去しさび取りを行った。

3) 脱塩処理

表面に付着している有機質等の剥落を防ぐため、資料全体を包帯で養生。ステンレス槽内のアセトンに資料を浸漬し、前回の処理で含浸された樹脂を除去した。脱塩後、養生をはずし脱落箇所を確認した。

4) 脱塩処理

付着有機質等の剥落を防ぐため、資料全体を包帯で養生。有機質への脱塩中の影響を最小限に抑えるため、常温純水を用いた2段階の方法で脱塩処理を実施した。

脱塩量の確認のため、定期的にステンレス槽内の溶液を採取し、イオンクロマトグラフィによる陰イオンの定量分析を行った。陰イオン測定は、東北芸術工科大学備え付けの機器で測定したため、日常的な脱塩量の確認は、他の方法で行う必要があった。そこで、溶液の導電率を測定することとした。事前に導電率と陰イオン量との関係を検討したところ、導電率と陰イオンの全量とは、良く相関することが確認できたので、この方法を採用し

た。

【第1段階：純水浸漬法】

本処理用に製作したステンレス水槽に資料と純水を入れ、一定期間静置したあと水を替える。これを資料重量の100倍の純水累積量となるまで繰り返す。

【第2段階：純水流し法】

ステンレス水槽に資料と純水を入れ、純水を滴下しつつ、同時に排水した。流量は12ml/min程度で、資料重量の150倍の純水累積量となるまで行う。

純水には防錆剤として、純水量の0.5wt%量のベンゾトリアゾールを2倍の容量のエチルアルコールに溶解させたものを添加した。また、大気中の酸素が純水中に溶け込むのを防ぐため、表面にビニールを敷いた。しかし、こうした処置を施しても、純水に浸漬することで誘発されるさびを完全に抑制することは困難である。そこで発生したさびが資料表面に沈着しないよう、こまめにさびを筆等で除去したり、資料の大手を逆転させた。

5) 脱水処理

ステンレス槽内のエチルアルコールに資料を浸漬し、資料内の水分を除去した。脱水後、養生をはずし資料表面に発生したさびを筆等で除去した。

次の工程である樹脂含浸以降の作業は、翌年度に実施することとして、この工程までを当年度に実施した。純水を用いた方法を採用したため、付着している有機質を損傷することなく、脱塩処理が実施できた。

(2) 学会発表等

センターの業務にかかわる、学会での研究発表等としては、上記した共同研究成果の発表以外に、次の発表を行った。

日本文化財科学会第20回大会（ポスターセッション） 2003年5月17・18日 於：高根県民会館

「特殊な遺物の取り上げと保存処理」 藤沢敦・千葉直美・京野恵子・高木暢亮

2001年度に調査を実施した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点では、有機質遺物が多数出土した。中には、犬の全身骨格、植物纖維で編まれた俵、埋設された桶など、特殊な遺物も存在した。これらについては、出土時の状態を維持して取り上げる必要があり、取り上げ方法から保存処理まで、通常とは異なる方法を工夫する必要があった。その方法の検討結果と、取り上げの実践例を、ポスターで報告したものである。

学会誌などでの研究成果発表としては、「宮城考古学」第5号（宮城県考古学会・2003年5月発行）に、藤沢敦・千葉直美による「糖アルコール含浸法による出土木製品保存処理の応用と課題」を投稿した。この内容については、下記の宮城県考古学会研究発表会でも口頭発表するとともに、実際に保存処理を行った遺物を会場で展示了した。

平成15年度宮城県考古学会総会・研究発表会 2003年5月18日 於：東北歴史博物館

「糖アルコール含浸法による出土木製品保存処理の応用と課題」 藤沢敦・千葉直美

(3) 資料調査

センター業務にかかわる資料調査等としては、以下の2件で、それぞれ担当する調査研究員が出張した。

2003年11月21～22日 第5回考古科学シンポジウム「弥生・古墳時代の新時代観」 於：名古屋大学

高木暢亮

2004年1月31日～2月1日 江戸遺跡研究会第17回大会「続遺跡からみた江戸のゴミ」 於：江戸東京博物館

柴田恵子・高木暢亮

(4) 科学研究費採択状況

2003度において、当センター調査研究員で、科学研究費等の交付を受けたものは次の通りである。

藤沢 敦 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) (代表・新規)

「小規模墳の消長に基づく古墳時代政治・社会構造の研究」

8. 教育普及活動

(1) 非常勤講師

2003年度に、当センターの調査研究員で、非常勤講師を担当したものは次のとおりである。

藤沢 敦 宮城教育大学 考古学講義（後期）

(2) 保管資料の貸出

当センター保管の資料の貸出依頼等としては、次のとおりであった。

・貸 出 先：仙台市博物館 平成15年度企画展「土の中の仙台 出土品にみる江戸時代のくらし」

貸出資料：仙台城跡二の丸地区出土陶磁器129点・調査状況写真3点

貸出期間：2003年7月1日～9月1日

・貸 出 先：東北歴史博物館 平成15年度特別展「鮭－秋を待つ人々－」

貸出資料：仙台城跡二の丸第5地点出土木簡3点

貸出期間：2003年9月8日～12月24日

(3) 外部からの派遣依頼等

当センターの業務に関わって、あるいは調査研究員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

2003年6月6日 平成15年度第1回大安場古墳整備指導委員会

2003年6月28日 仙台市史でさえ講座講師「古墳時代の仙台と岩切の古墳」

主催：仙台市史編纂室 於：仙台市岩切市民センター

2003年9月16日 第39回文化財展「仙台城展－国史跡指定記念特別展－」記念シンポジウム

パネリスト「政宗のこどもたち、宗泰と五郎八姫の屋敷について」

主催：仙台市教育委員会 於：仙台市博物館

2003年10月24日 平成15年度第2回大安場古墳整備指導委員会

2004年1月12日 仙台市史城館部会

2004年1月23日 平成15年度第3回大安場古墳整備指導委員会

(4) 広報活動

2003年度は、広報活動としては、特に行っていない。

第Ⅱ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9）の調査

1. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台藩初代藩主の伊達政宗によって、慶長5年（1600年）12月24日の堀張始めを嚆矢として、本丸の築造が始められる。この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があつたと伝えられる。元和6年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館である「西屋敷」が造られる。政宗死去後二代藩主となった伊達忠宗によって、寛永15年（1638年）に二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸へ移される。二の丸は、元禄年間の改造によって、ものと「西屋敷」の敷地を取り込んで拡張され、幕末まで仙台城の中核として機能していく。

仙台城下は、仙台城本丸の造営に伴って造られていく。慶長6年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付タル」との記録が残されている（『貞山公治家記録卷之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。

正保2年（1645年）の『奥州仙台城絵図』においては、仙台城の周辺には、「侍屋敷」が広がっていたことが判り、おそらく本丸の造営が開始された頃から、屋敷が造られていったものと思われる。正保絵図は幕府提出用の絵図のため、細かな屋敷割は記されず、屋敷を使っていた人名は判らない。それ以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも比較的上級の家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城とその周辺も大きく変化する。明治2年（1869年）の版籍奉還により二の丸には勤政庁が置かれ、明治4年（1871年）の廢藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本營として引き続き利用された。しかし、明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第一師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には、第二師団の司令部が置かれた。

川内地区的仙台城周辺の武家屋敷地も、明治に入ると取り壊され、その多くは後の第二師団の用地となっていく。東北大学川内北地区には、第二師団の歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。

川内北地区周辺の道路の配置は、絵図を見る限りでは変化が無く、江戸時代を通じて変わらなかったと考えられる。しかし、明治時代にこの区域の道路は大きく改変される。現在の道路配置は、この時に改変されたものであり、江戸時代の道路とは大きく変わっている。明治時代の地図の検討からは、明治15年（1882年）から明治26年（1893年）の間に、川内北地区周辺の道路は、現在見る形に変わっていったものと考えられる。おそらく、明治21年（1888年）の陸軍第二師団の設置に前後して、この区域の整備が進められていったものと考えられる。

なお、この地区での武家屋敷の変遷や、明治以降の変化については、二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査成果を取りまとめた、年報19の第1分冊において詳しく述べてあるので、そちらも参照されたい。

戦後は、川内地区一帯が米軍の駐留地となる。昭和32年（1957年）に米軍から返還された後、川内北地区には東北大学教養部が、川内南地区には文系4学部や図書館などが置かれ、現在に至っている。

2. 調査経緯

(1) 2002年度までの調査

東北大大学の川内北キャンパスは、仙台城二の丸にすぐ隣接し、密接に関連する重臣の屋敷が広がっていたことから、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含められている。当調査室では、この区域を、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区と呼称している。

この二の丸北方武家屋敷地区では、1979年にごく小規模な調査が実施されたことがあるが、それ以外の調査は、当調査室（前身の調査研究センター・調査委員会を含む）によって実施されたものである。2002年度までに、第1地点から第8地点までの調査が行われている。この内、第1地点は試掘調査のみであったが、それと一部重なる区域で第7地点の調査を実施している（年報19）。第2地点と第3地点は結果的に立会調査で終了したので、欠番となっている（年報3）。したがって、実質的には、第4地点から第8地点の、合計5地点を調査していることとなる。この内、第5地点（年報7）、第6地点（年報14）、第8地点（年報20）は、小規模な調査であった。第4地点（年報13）と第7地点（年報19）の2ヶ所が、規模の大きな調査となる。いずれの調査においても、多数の遺構と、膨大な数の遺物が出上している。検出遺構の中には江戸時代初頭に遡るものもあり、これらの区域における武家屋敷の整備が、江戸時代初頭に始められていることが明らかとなっている。また明治時代になり屋敷が取り払われた後、軍隊が使うまでの間、畝状の遺構が広がり、畝として利用された時期があることが判っている。

(2) 調査地点の位置

調査地点は、川内北地区の体育馆のすぐ東側の場所である。図8では、調査区が体育馆の範囲に入り込んだ位置に示されている。この図で示されている体育馆は、屋根の範囲が示されている。体育馆の屋根は、壁から3mほど外側まで出っ張っているため、調査区の一部が屋根の下へ入り、図8のような位置関係になっている。

体育馆と東側のグランドの間には、比高7mほどの段差がある。これは、本来は段丘崖による段差であると考えられるが、現在は全体に石垣が築かれている。第1章で報告したが、今年度に、この石垣の改修工事に伴い立会調査を実施した。立会調査の結果、この石垣は明治時代以降に築かれたものであることが確認されている。調査地点は、体育馆と石垣の間で、石垣にすぐ隣接する場所である。

今回の調査地点の南南東、約50mのところが第4地点の調査区になる。第4地点では、調査区の北東側が、現在の石垣と併行する形で、明治時代以降に削平されていた。そのため、段丘崖に近い部分については、江戸時代の様相は判明していない（年報13）。

(3) 調査の方法と経過

今回の調査は、音楽・舞蹈系課外活動施設である川内ホールの建設に伴う調査である。新築される建物は、軽量鉄骨造2階建で、比較的簡素な構造であった。建設場所は明治以降の盛土が厚いと考えられる区域で、建物基礎も小規模となる計画であったため、当初は立会調査で対処する予定であった。しかし、計画の検討が進むと、建設場所が石垣を作り段差に近いことから、基礎杭を打った上に基礎を設置することが必要となった。この工法変更により本格的な基礎工事が行われることになったため、記録保存のための本調査を実施することとした。

調査地点は明治以降の盛土が厚いことが予想されたため、安全対策を講じる必要があった。そこで本調査に先立ち、調査地点の盛土の厚さなどを確認するため、5月13日に試掘調査を実施した。調査予定地を東西に横切る形で重機により掘削し、盛土の状況などを確認した。この試掘調査の結果、調査予定範囲の東側には、段丘崖による斜面が存在し、東へ行くほど盛土が深くなっていくことが確認された。調査区の西側は、段丘崖の上の平坦面が存在することが確認された。以下の記述では、段丘崖の斜面を斜面として省略して呼称し、段丘崖上の平坦

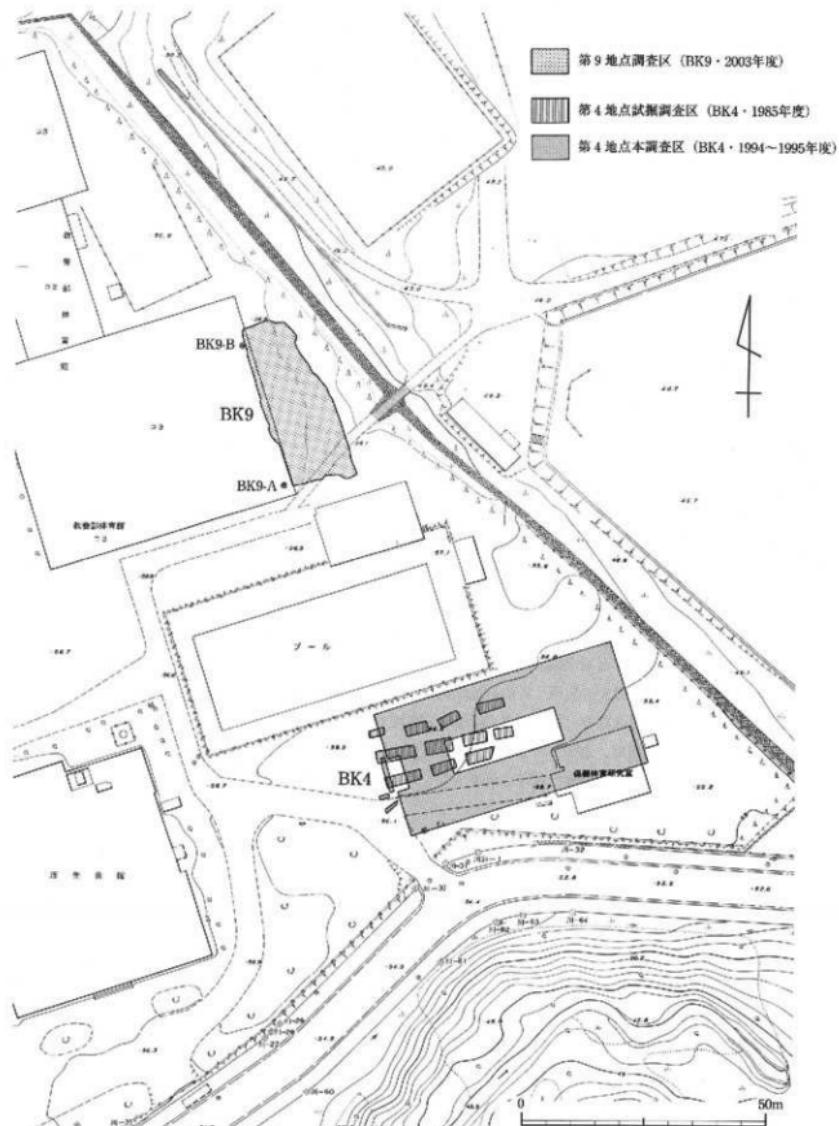


図8 武家屋敷地区第9地点調査区の位置
 Fig.8 Location of BK9 (BK9 i.e. Location 9 of samurai residence)

面を平坦面と呼称することとする。

調査範囲は、基礎工事で掘削される範囲を基本としたが、石垣に近い部分で深く掘削することは危険なため、東側は石垣上端から8m離れたラインを掘削範囲の限界とした。そのため、建物建設範囲の北東部が、調査対象範囲からはずれている。調査区の東側では、もとの地表面は相当深くなることが判明しており、基礎による破壊もほとんどおよばないので、調査対象から除外した。掘削は現地表より4mの深さまでとして、それ以上深い部分については調査は行っていない。安全対策のため、2mの深さの所で幅2mの段を設け、2段掘りとした。

試掘の結果、明治以降の盛土が厚いことが判明したため、表上除去は重機で行った。調査区東側に米軍時代の共同溝が存在することも判明していたので、掘削作業は共同溝の撤去から開始した。調査区の中程のB・C-6～10区には、大規模な擾乱が存在した。重機掘削作業中に確認できたため、内部も重機で掘削した。現地表より3mまで掘削したが、さらに深いことが判明した。それ以上の掘削は危険と判断し、この擾乱を掘り上げることは断念し、作業中の発生上で埋め戻した。

調査区の西側は、体育館に沿って排水管が埋設されていた。調査区の西壁が、この排水管理設のための掘り方に近接する位置になってしまった。そのため西壁はきわめて脆弱で、降雨の影響もありたびたび崩壊した。脆弱な部分を除去し、土嚢を積み上げることで養生したが、調査を開始したのが梅雨の末期という時期であったため、降雨のたびに崩壊が拡大して、対策に難渋した。

西よりの平坦面は、5列より北側では、整地層も少なく地山まで調査を実施できた。しかし5列より南側では盛土や造構理土がより深くまで続いているため、それらを掘りあげて調査すると壁が大きく崩壊する危険があった。すでに調査による掘削深度が、基礎杭の予定深さに近くになっており、工事での破壊はほとんどまぬがれる見込みであった。そのため調査区南側では、江戸時代の層序を掘りあげずに途中で終了している。この内、B-4・5区では、V層・VI層を除去した段階で、より下層に造構が存在していた。これらの造構は、ごく一部を掘り込んだ以外は、平面プランの確認だけに留めている。B-2・3区では、V層上面まで終了している。

調査区南よりのC-3・4区では、段差のところに設けられた小規模な石垣が発見された。この石垣も、基礎工事での破壊はほとんどまぬがれる見込みであった。そのため、石材を取り外した調査は行わず、石垣の前面に土嚢を積んで養生した上で埋め戻した。

建設される建物が体育館と平行して造られるため、体育館の東端の壁を基準として、グリッドラインを設定し、3mグリッドを組んだ。グリッド設定のため設置した基準点の位置は、図8・13・14に示した。基準点の国土地標値は、以下のとおりである。平面直角座標系は、X系である。グリッドは、北で17° 00' 50" 西偏している。なお、川内地区に設置している遺跡調査用の測量基準点は、日本測地系で測量されている。そのため世界測地系での座標値は、日本測地系で測量した座標値を、国土地理院が提供している座標変換プログラムTKY 2 JGDによって変換したものである。

BK 9-A 日本測地系 X = -193,344.389 世界測地系 X = -193,035.657

Y = + 2,051.969 Y = + 1,755.072

BK 9-B 日本測地系 X = -193,315.702 世界測地系 X = -193,006.971

Y = + 2,046.191 Y = + 1,746.294

平面図・断面図は、縮尺1/20で作成した。今回の調査区は段丘巣にかかる区域であったため、旧地形の高低差が大きかった。その傾斜を記録するため、25cmセンターで等高線を記録した。記録写真は、35mmのカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、全景写真など要所では、6×7のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影している。

3. 基本層序と時期区分

(1) 基本層序(図9)

基本層序の確認のため、調査区を東西に横切る形で、土壠観察用のベルトを設定し記録した。場所により基本層序に違いがあること、南側で発見された石垣の表込めの状況を確認するため、4ヶ所で横断ベルトを設けて記録することとなった。横断ベルトは、北からA B C Dの4ヶ所である。図15・16の図中に示した、セクションポイントのA-A'が横断ベルトAというように、名称を対応させてある。

基本層序は、区域により違いがあり、対比ができなかったため、それぞれ別の層名を付けた。2層から5層は、段丘崖の斜面に堆積した崩壊土層である。II層からVII層は、斜面上段の平坦面で確認された整地層である。図9に示した模式図は、上段が横断ベルトB、下段が横断ベルトCをもとに作成したものである。

1層

近代以降の盛土と考えられる層を1層としてまとめた。西側では1.8m程度、東よりの深い部分では4m以上の厚さとなる。

2層

黒褐色を基調とする砂質シルトで、若干グライ化した部分がある。上面に炭化物が薄く残る所がある。厚いところで25cm程度である。

3層

黒褐色のシルト質砂を基調とするが、酸化鉄の沈着が激しく、そのため赤みの強い色調に見える。厚いところで15cm程度である。この3層より下位の層は、全体に小礫が多く含まれている。これらの礫は、地山の礫層に由来するものと考えられる。

4層

灰基黄褐色から褐色のシルト質砂を基調とする。全体にグライ化している。厚いところで25cm程度である。

5層

灰黄褐色のシルト質砂を基調とし、地山に近い層相である。厚いところで15cm程度である。

II層

大規模な擾乱の北側、B-9~11区で確認された。暗褐色の砂質シルトを基調とする。厚いところで15cm程度である。このII層に覆われる1号遺構からは、幕末ごろの陶磁器が出上している。このことからII層は、幕末以降に形成された層序と考えられる。

III層

調査当初は、IV層より上位と認識していたが、最終段階でV・VI層より下位になることが判明したので、整理・報告段階でⅢ層に改称した。よってⅢ層は、欠番とする。

IV層

4列から南側に分布する。褐色の粘土質シルトを基調とする。礫を含むが、V層より量は少ない。層の厚さは15cm程度である。

V層

4列と5列の境付近から南側に分布する。褐色の粘土質シルトを基調とする。径10cm程度の円礫を大量に含む。石垣の表込め部分に続いている。表込め部分は、V層よりも礫の割合が多くなる。表込め部分を断ち割って調査していないので、V層との関係は明確でないところもあるが、基本的に同一段階に整地されたものと考えられる。表込め部分以外で、最も厚い所の厚さは35cm程度である。

VI層

B-C-4区で確認されている。最大で5cm程度の薄い層で、途切れ途切れに分布している。褐色の粘土質

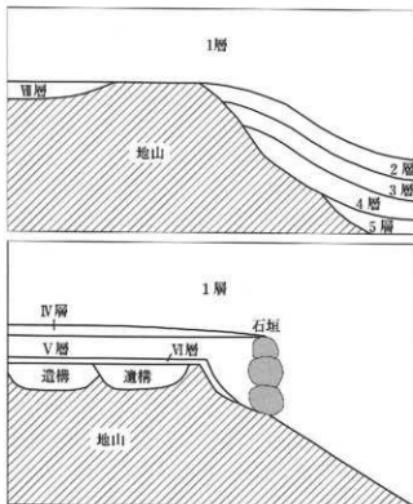


図9 武家屋敷地区第9地点基本層序模式図
Fig.9 Schematic profiles of BK9

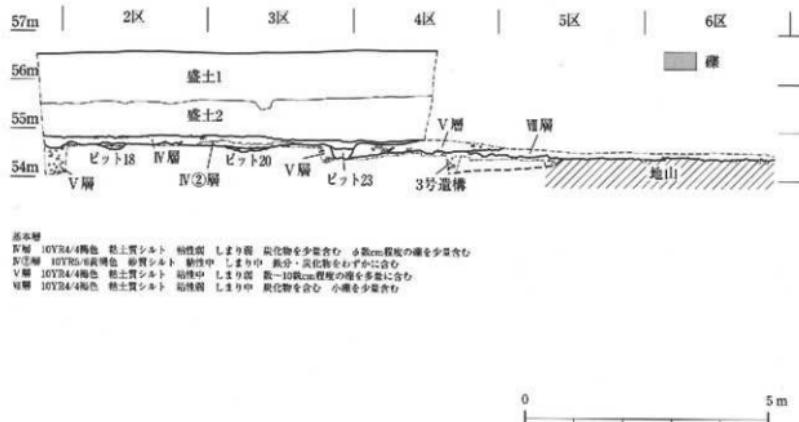


図10 武家屋敷地区第9地点基本層序断面図 (1)
Fig.10 Cross sections of excavation at BK9 (1)

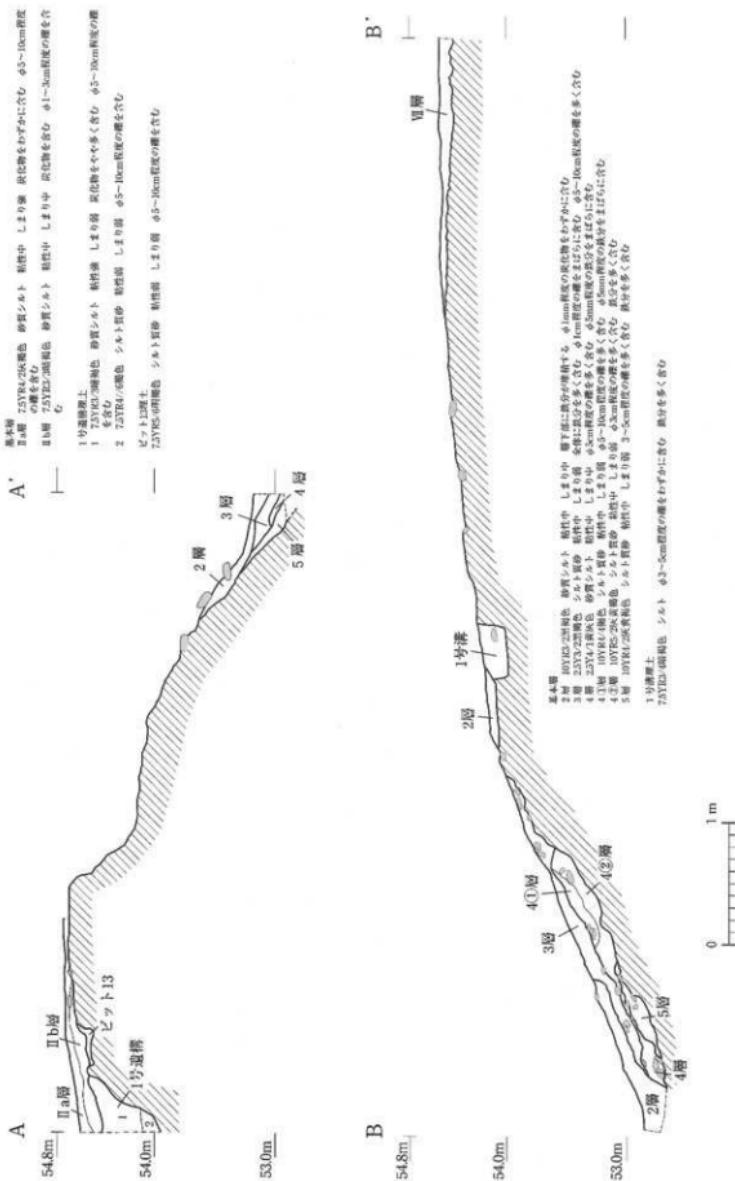


Fig.11 地震活動地区築9地盤基本断面図(2)
Fig.11 Cross sections of excavation at BK9 (2)

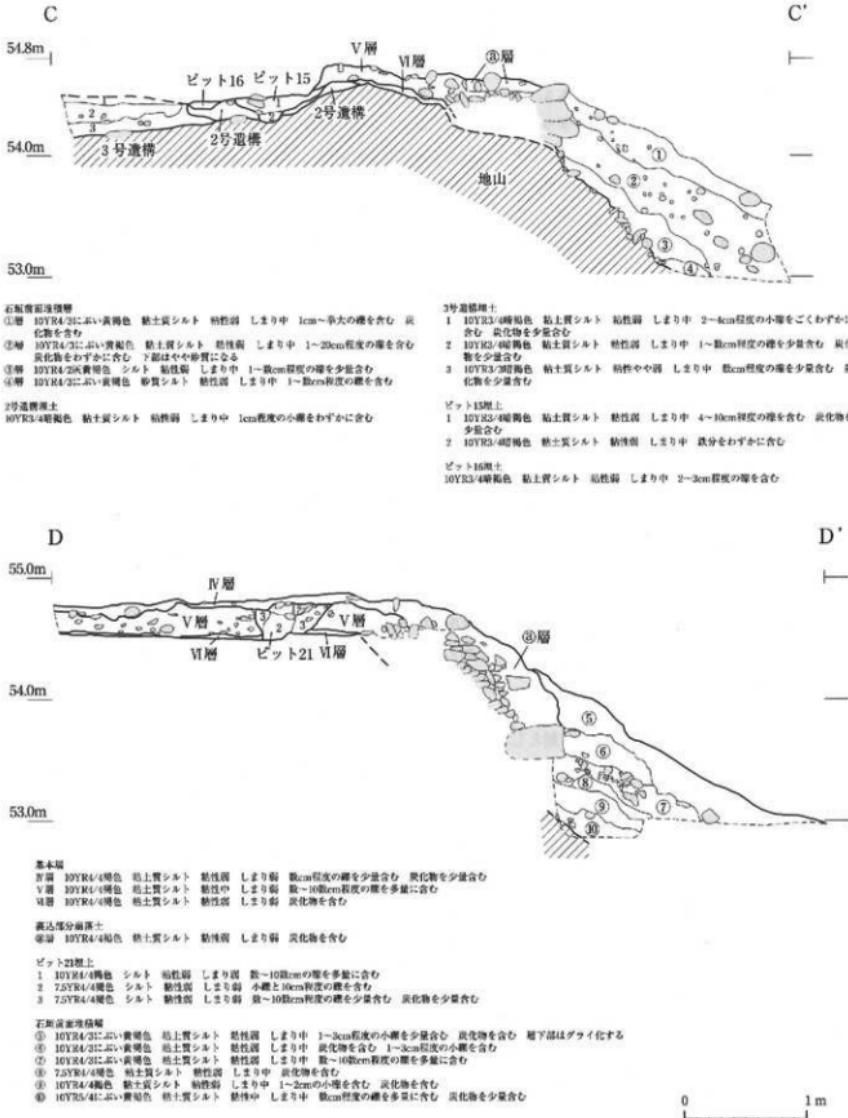


図12 烏家屋敷地区第9地点基本断面図(3)
Fig.12 Cross sections of excavation at BK9 (3)

シルトを基調とする。礫を含むが、V層より量は少ない。横断ベルトCでは、このVI層が石垣裏込めの最下部に入り込んでいることが確認されている。

Ⅴ層

調査時にはⅢ層としていた層序である。4列の北寄りから大規模な攪乱までの範囲に分布するが、平坦面の東端に近い部分には分布しない。若干グライ化した粘土質シルトの土壌である。調査当初は、盛土直下でⅣ層より上位であると認識していた。しかし最終段階で、調査区西壁で基本層序を検討したところ、V・VI層より下位になることが明らかとなったので、Ⅴ層に改称する。層の厚さは、厚いところで15cm程度である。

石垣前面堆積層

C-3～4区では、段差の斜面を削り込んだところに造られた小規模な石垣が検出された。石垣の前面の斜面を削り込んだ部分には、遺物を比較的多く含む土層が堆積していた。上部から崩壊した土塊が堆積した、自然堆積層と考えられる。調査した範囲内の、最も厚い所で測って1m程度の厚さがある。まとめて調査中は仮A層と呼称した。幾つかに細別したが、基本的な層相は類似する。にぶい黄褐色から褐色の粘土質シルトを主体とするが、下部には砂質の部分もある。礫を多く含んでおり、これらは石垣の裏込め層に由来するものと考えられる。段差の斜面が残る部分に堆積した2～5層は、斜面が切り込まれているところの境で、分布がほとんど途切れるため、石垣前面堆積層と2～5層の関係はつかめなかった。遺物が比較的まとまって出土しており、幕末頃のものが主体を占める。

地山

地山層は、段丘疊層および、標層のすぐ上位の固くしまった黄褐色粘土層である。南半部の平坦面に粘土層が若干残っている以外は、段丘疊層が露出している。

(2) 変遷段階の設定と推定時期

変遷段階の設定にあたっては、整地層が多く確認された平坦面南半部での認識を基準とした。南半部では、遺構の掘り込み面が、地山上面、V層上面、IV層上面の3段階認められた。これを基準に、他の区域を対比させ、I期からⅢ期の3段階に区分した。

I期

整地層の下面の、地山面の段階をI期とした。

Ⅱ期

平坦面南半部では、V・VI・VII層が整地された段階で、遺構が掘り込まれていることが確認されている。そのためV層上面段階を区分して、Ⅱ期とする。平坦面北側と斜面では、対応すると考えられる整地層が存在しないため、地山面となりI期と変わらない。V層が石垣裏込め層と同じ段階と考えられることから、石垣が構築された時期と考えられる。

Ⅲ期

I層とした明治以降の盛土直下の段階である。Ⅱ期段階から、平坦面は北側ではⅡ層、南側ではⅣ層が整地され、斜面では2～5層が堆積した段階で、これらの層の上面の段階となる。

I期の遺構は確認に留めている部分が多く、I期の開始時期については、細かな限定は難しい。川内地区での武家屋敷としての利用が、17世紀初頭であることから、上限は17世紀初頭と考えられる。

I期からⅡ期へ移り変わる時期についても、厳密に確定することは難しい。I期の遺構から出土した遺物である程度特徴が判明するものとしては、ビット19出土の陶器中型丸碗（図18-C T 2）があり、18世紀前半のものであろう。ビット17からは、細片で図示していないが、18世紀代と考えられる灰釉碗が出土している。これらから、Ⅱ期が18世紀まで差し掛かることは間違いない。次に、I期とⅡ期を区分するV層・VI層・VII層の出土遺物

見てみたいが、VI層からは陶磁器は出土していない。V層出土の陶磁器は、少量の上、細片ばかりで、細かな年代が判るものはない。その中で、陶器に大堀相馬の郷印を施したものがあり、釉薬の様相からは19世紀代に下るものである。しかし、1cmにもみたないごく細片で、混入の可能性も否定しきれない。VI層から出土した陶磁器では、磁器に絵文や若松文の中型丸碗や陶器に小野相馬の中型丸碗など、18世紀代の遺物が含まれる。一方、次のII期の遺構では、遺物から年代が判明するものはほとんどないが、確実に18世紀代に遡るものはない。以上の点から、おむねI期が18世紀代まで、II期が19世紀代を主体とすると考えておきたい。

II期からIII期へ移る時期については、両者を区分する層序からの出土遺物が参考になる。斜面部分では、2～4層で陶磁器が出土しているが、いずれも幕末が主体で、それより古い資料も混在している。その中で、4層から出土した、大堀相馬の山水文土瓶の可能性がある破片が、最も新しい遺物である。これは、白化粧をした上に、鉄絵で細い線描きを施した細片で、文様部分は残っていないが、大堀相馬の山水文土瓶と考えられる。大堀相馬の山水文土瓶の出現時期を厳密に限定することは難しいが、主体となるのはむしろ明治に入ってからと考えられる。仙台城二の丸の資料でも、明治15年の火災に伴う廃棄層に多い。平坦面の整地層ではIV層が対象となるが、磁器・陶器とともに、18世紀から19世紀の資料が混在している。その中で、細片のため器種は不明としたが、大堀相馬の鉄絵の細い線描きで花文を表したものがあり、明治初頭に下る可能性も残る。石垣前面の堆積層からは、磁器・陶器とも18世紀から19世紀の資料が混在して出土している。中でも19世紀のものが主体を占め、幕末より確実に下るものは含まれない。これらの出土遺物の状況から、II期からIII期へ移る時期は、明治時代に入り込む可能性もあるが、明治時代に下る遺物の割合はわずかであるため、下っても初年度に留まるものと考えられる。以上の状況を踏まえれば、II期からIII期への移行は、幕末から明治初頭と考えて大過ないと思われる。

今回の調査区の東側には、グランドとの境に大規模な石垣が造られている。この石垣は、大規模な盛土でIII期の遺構を埋めた上で造られている。江戸時代の絵図と明治時代以降の地図を比較すると、川内地区では、明治21年の第二部図設置の前後に、道路の位置が変更されている。調査区東側の石垣は、南北両端が現在の道路の位置に合わせて造られている。この点から、この石垣は道路が付け替えられたのと同じ、明治21年前後に造られた可能性が高い。このことから、III期の下限は、明治21年（1888年）頃と推定される。

以上をまとめると次のようになる。

I期：17世紀初頭からおむね18世紀代

II期：おむね19世紀代で幕末頃まで

III期：明治初年頃から明治21年（1888年）ごろまで

4. 検出遺構

（1）I期の遺構（図13・15・17、図版2・5～8）

段丘崖に由来する段差があり、段差の上の平坦面では、掘立柱列が2条、ピット4基、性格不明の遺構である2号遺構と3号遺構が検出されている。4基のピットは、いずれも2号遺構・3号遺構埋土に掘り込んでおり、これらより新しい。またV層の下面が、B-3区で南側に向かって落ち込んでいっているのが確認されている。しかし、南側は未掘のため、詳細は不明である。

【段差】

段丘崖に由来する段差で、本来は自然に形成されたものである。北側では、上の平坦面から60cmほど下ったところで、幅0.5～1.1m程の平坦な部分が確認されており、この部分は人為的な造作が加えられている可能性がある。ただし、この平坦面があるところでは、地山のすぐ上位の層が1層となっており、どの段階で加えられたものであるかは不明である。段差の方向は、等高線の走る方向で測ると、北から26°西偏している。この段差は、4列までは、ほぼ直線的に延びている。5列以南も、本米は北側の延長で、直線的に延びていたものと考えられ

るが、II期の石垣が造られている削り込みによって改変されており、不明である。この削り込みがなされた時期については、石垣の構築と同じであればII期であるが、石垣の構築に先行して削り込まれていた場合には、I期に遡る可能性もある。

【1号柱列】

B-5・6区で検出された掘立柱列である。柱穴3基のみの検出である。北側は大規模な擾乱のため不明で、南側の延びは判然としない。方向は、北から26.5°西偏する。1号柱列の柱1と柱2が、それぞれ2号柱列の柱1と柱2を切っている。柱間の間隔は6尺と考えられる。これまでの川内地区での調査成績から見ると、6尺という柱間間隔は江戸時代には類例が無く、明治時代以降に出現する。柱穴3基のみであるので、柱間寸法が若干ずれる可能性も残る。柱穴は、径40~75cmの不整形を呈するが、隅丸方形を指向している可能性もある。深さは20cm程度である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

【2号柱列】

1号柱列の東側に沿って、B-5・6区で検出された掘立柱列である。柱穴3基のみの検出である。北側は大規模な擾乱のため不明で、南側の延びは判然としない。方向は、1号柱列とほぼ同じで、北から27°西偏する。2号柱列の柱1と柱2が、それぞれ1号柱列の柱1と柱2に切られており、2号柱列が古い。柱間の間隔は5尺と考えられる。柱穴は、径30~60cmの不整形を呈するが、隅丸方形を指向している可能性もある。深さは20~30cm程度である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

【2号遺構】

B-3~5区で検出された。平面プランのみの確認で、埋土は一部分を掘り下げただけである。そのため、遺構の性格や詳細な時期は不明である。南北4.2m程、東西1.6mの、南北に長いプランである。3号遺構を切っており、2号遺構が新しい。横断ベルトCに沿ったところで、一部断ち割って調査した部分では、深さは20cmで、皿状の浅い落ち込みになる可能性がある。埋土をほとんど掘っていないため、出土遺物は極めて少なく、磁器1点、陶器3点だけである。特徴のある程度判るのは、図示した磁器小中皿(図19-CJ2)と陶器壺壺類(図18-CJT1)の2点のみで、他はごく細片である。

【3号遺構】

B-3~5区で検出された。東側のほとんどは2号遺構に切られており、西側は調査区外へ続く。南側は、V層の未掘部分まで続いている。そのため、全体の規模・形状は判然としないが、南北4.9m以上、東西2m以上となる。北端部分の調査区西壁際を一部掘り下げた所見では、浅く落ち込んでいており、横断ベルトCの深掘り部分で35cm程度の深さである。比較的浅く、広い落ち込みとなる可能性が高い。一部しか掘り下げていないため、性格や詳細な時期は不明である。遺構ではなく、整地層の範囲をとらえている可能性もある。埋土をほとんど掘っていないため、出土遺物は極めて少ない。磁器6点、陶器1点、土師質土器5点だけである。図示し得たのは青磁香炉(図19-CJ1)だけである。他に、陶器には長石釉の丸皿の小片が含まれており、17世紀初頭から前業に遡る資料であるが、遺構の年代よりは古いものである。

(2) II期の遺構(図13・16・17、図版2・5~8)

段丘崖に由来する段差の南よりの部分では、この段差が大きく削り込まれている。削り込まれた部分には、小規模な石垣が設けられている。段差の上の平坦面では、擾乱の北側で1号遺構が検出されているほか、1号遺構の付近でピット2基が検出されている。擾乱の南側では、1号溝が平坦面の縁に近い場所で検出された。南よりのB-2~4区では、8基のピットが検出されているが、相互の関係は明らかにはできなかった。

【段差】

5列より北側では、I期と同じである。4列と5列の境付近より南側は、大きく削り込まれている。この削り

込まれた部分の西端に近いところに石垣が設けられている。削り込んだ時期が、石垣の構築と同時か否かは確定できていない。削り込まれた範囲は、南に行くほど広くなっている、深さも深くなっている。

千賀沢を越えた二の丸の北側には、東西方向の道路が3本走っていた。南から筋違橋通、中ノ坂通、亀岡通と呼ばれていたが、明治21年（1888年）の第二師団設置の頃に、道路が付け替えられている。この内の中ノ坂通の推定位置が、今回の調査区付近にある。そのため、この段差を削り込んだ部分は、段丘岸の段差を道路が東西に抜けていくために、切り通し状に掘り下げた部分に相当する可能性がある。しかし、削り込んだ部分の傾斜が、本来の傾斜と比べて、特段傾くなっている訳ではなく、道路の切り通しとは断定できない。

【石垣】

C-3・4区では、段差を削り込んだ部分の上部を横切るように、小規模な石垣が造られている。南側は調査区外へ続く。石垣の基底レベルは、南に行くとともに低くなっている。C-3区の中程から南側では、調査した深さより石垣の基底レベルが深くなっている。石垣の方向は、北で 10° 西偏しており、段差の走る方向より東側に振れている。この石垣が構築されている削り込み自体の性格が不明な上、周辺の状況も判然としないので、どのような目的で造られた石垣かを推測することは難しい。

石垣が構築されている基盤は、地山の急斜面となっている。石材をはずして基底部や裏込め部分を調査することは行っていないので、石垣構築時の様相はあまりはっきりしない。横断ベルトCでの観察結果からは、地山の急斜面を、さらに段切りするように削って平坦な段を造り出した上に、石材を積んでいったものと推定される。

石垣は、北端を除くと、上部は崩壊しており残っていない。基底の一列のみが残る部分が多い。石材は、一部に打ち欠かれたものもあるが、自然石をほとんど加工せずに使用している。基底の石は、幅50~70cm程度の大振りな石を、横手に置いている。北端に近い部分では、小振りの石を用いている。縦に、細長い石を組み込んでいるところもある。横断ベルトCとDで、石垣の前面と基底部以下の地山のラインと比べると、石垣の前面がかなり前に出た形になっている。このことから、石垣は全体に、前方へ孕み出しているものと考えられる。石垣の背面には、1m程の幅で、裏込め層がある。裏込め層は、20cm以下の大きさの川原石を入れており、V層と同じ段階で施されたものと考えられる。裏込め部分からは、陶器の擂鉢が出土している（図18-C T 6）。ただし、裏込め層の上面から出土しており、確実に石垣構築時に遡るか否かは問題が残る資料である。

石垣の前面には堆積土が厚く堆積しており、比較的多くの遺物が含まれ、特に陶器が多い。ほとんどが幕末前後の時期であるが、より古い時期の遺物も混じっている。ある程度特徴の判明する、磁器1点と陶器3点を図示した（図19-C J 4、図18-C T 9~11）。

【1号溝】

擾乱の北側のB-9・10区で検出した。II層の下位で、地山面に掘り込んでおり、掘り込み面からはI期かII期かを判断することはできない。出土遺物が幕末を主体とするため、II期に含めた。

不整形な深い落ち込みが広がった中に、深い落ち込みが存在する。深い部分は、方形を基調とする可能性があるが、西側が調査区外へ延びていくため、不明である。西壁に接する部分での南北の長さは3.9m、深さは70cmを測る。遺物が比較的まとまって出土しており、特に陶器が多い。幕末前後の時期のもので占められており、確実に明治期に下るものは含まれていない。ある程度特徴の判明する、磁器1点（図19-C J 3）、陶器3点（図18-C T 3~5）、瓦質土器1点（図19-C G 1）、軟質施釉土器1点（図19-C N 1）を図示した。いずれも、幕末頃の製品である。

【1号溝】

C-5・6区で検出された、北西から南東方向に直線的に延びる溝である。北から 37° 西偏する。地山に掘り込んでおり、部分的に2層に覆われている。南側は、段丘岸の段差が削り込まれたところまで達している。この段差が削り込まれた部分と1号溝の新旧関係は、確認できていない。段差を削った時より古い時期の溝である可

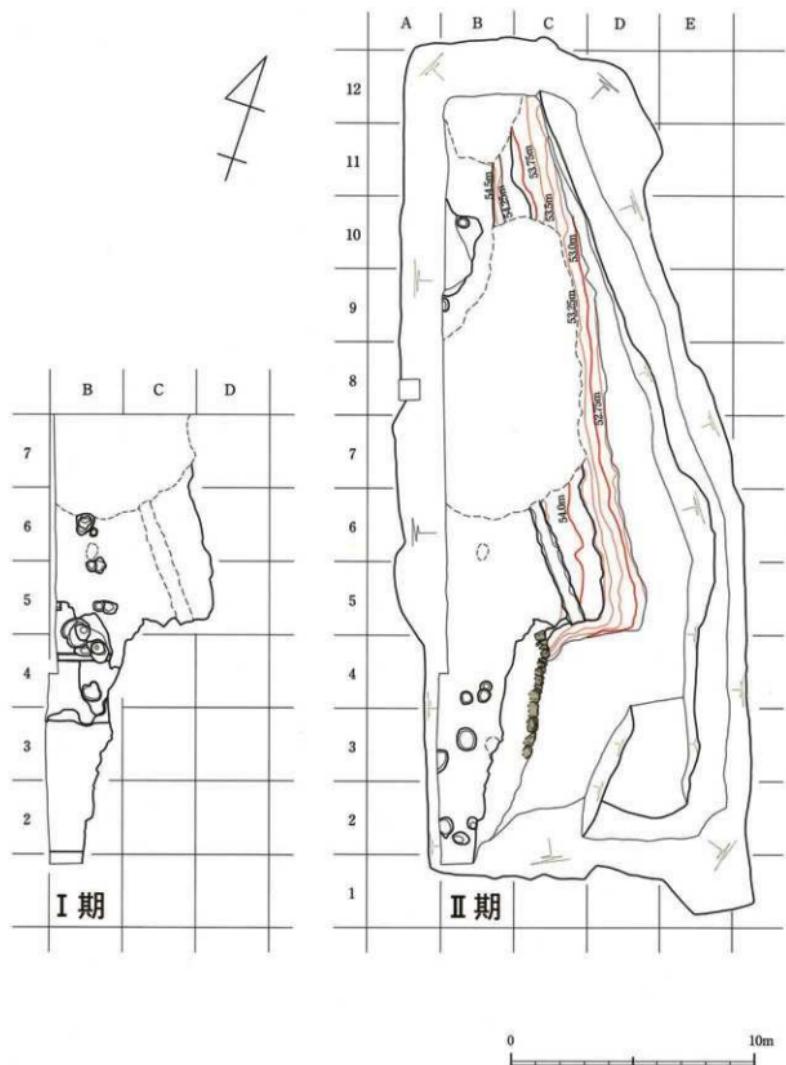


図13 武家屋敷地区第9地点造構配置図(1)
Fig.13 Distribution of features at BK9 (I)

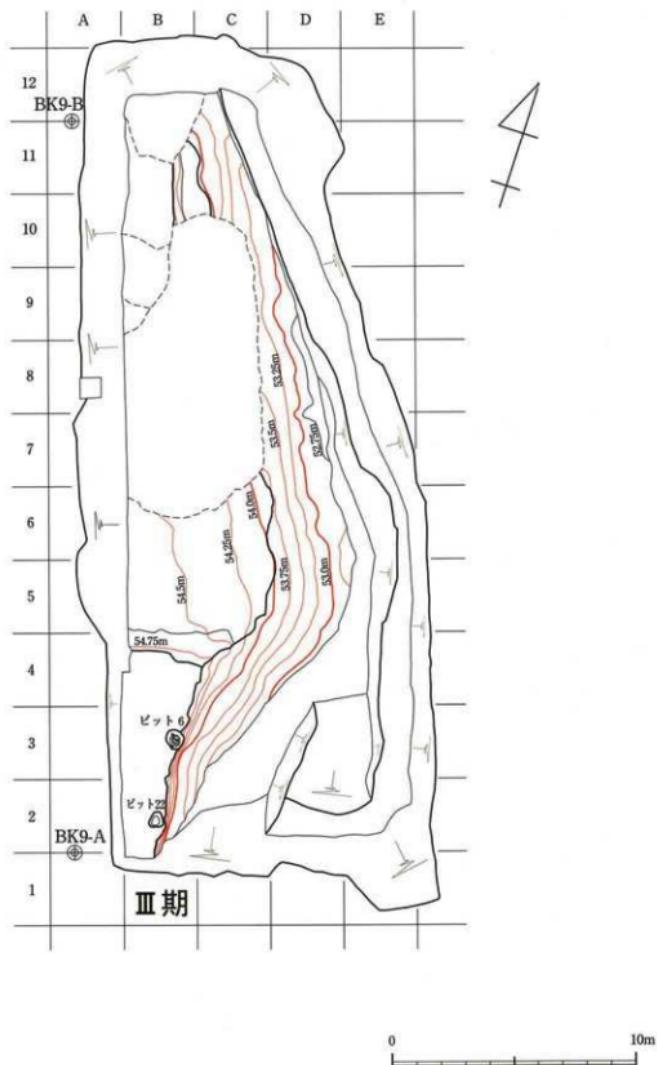


図14 武家屋敷地区第9地点遺構配置図(2)
Fig.14 Distribution of features at BK9 (2)

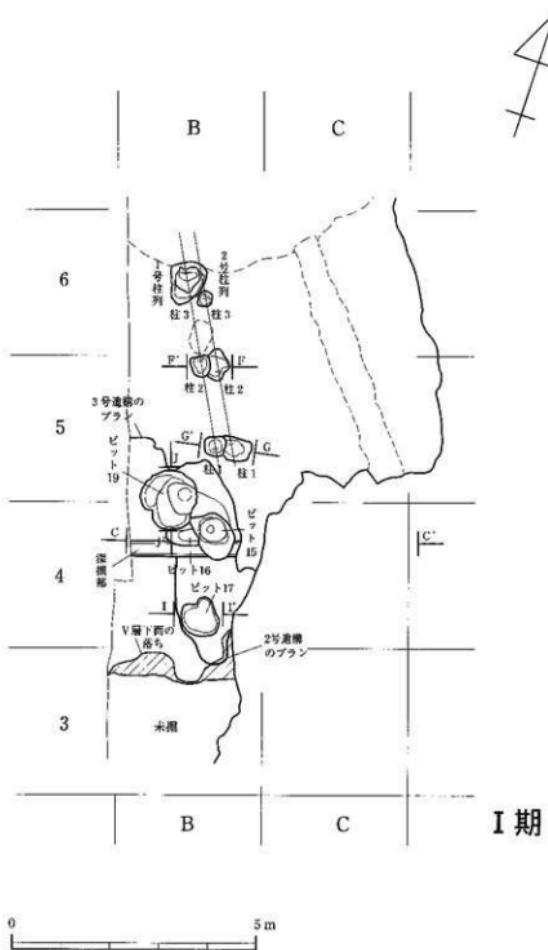


図15 武家屋敷地区第9地点検出遺構平面図(1)
Fig.15 Plans of features at BK9 (I)

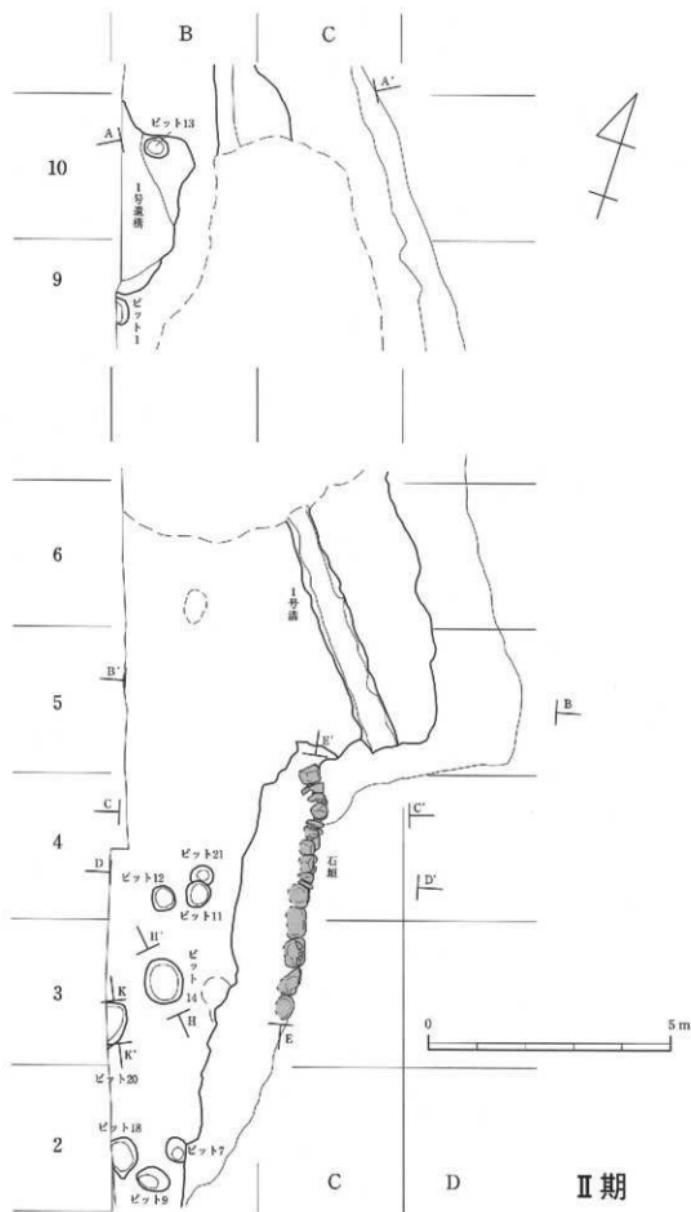


図16 武家屋敷地区第9地点検出遺構平面図 (2)
Fig.16 Plans of features at BK9 (2)

Ⅱ期

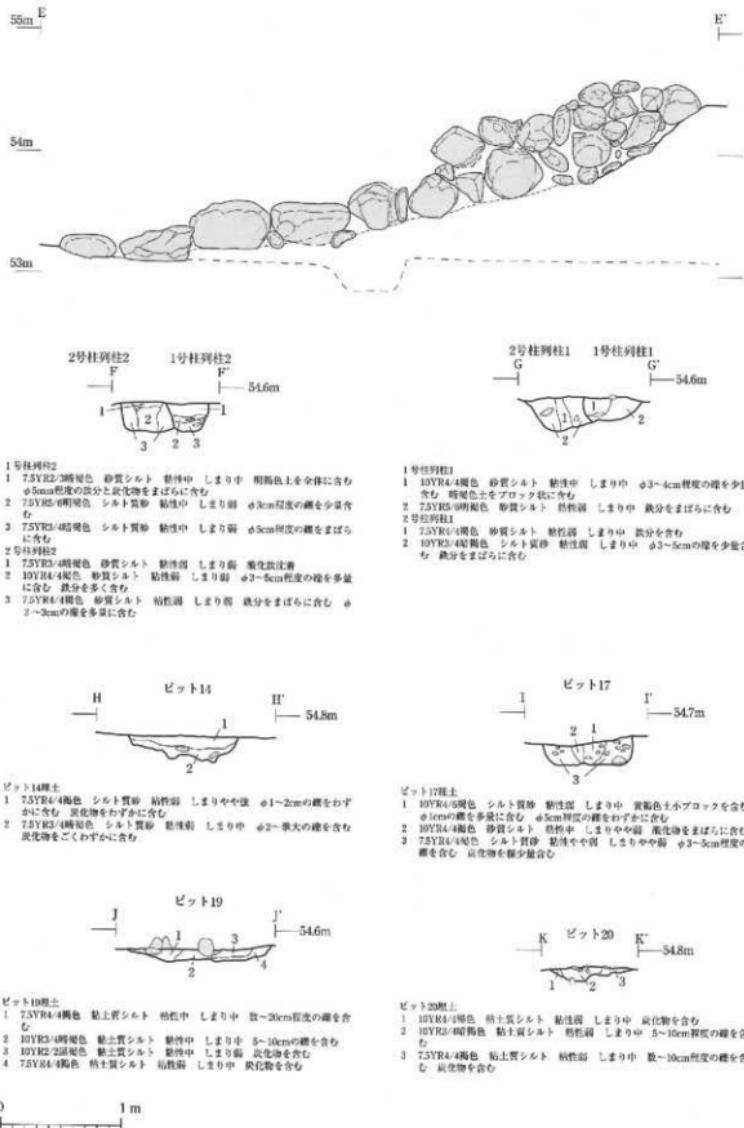


Fig.17 Cross sections of features at BK9

能性もある。その場合はⅠ期に遡ることとなるが、出土遺物から明らかに遡るものとの確証が得られないため、Ⅱ期に含めた。北側は大規模な擾乱のため破壊されている。直線的に延びていた場合は、擾乱の北側でも検出されるはずであるが、検出されていない。検出した長さは5.3m、上幅70cm前後、下幅50cm前後、深さ18~30cmを測る。断面形状は逆台形だが、壁の傾斜は強く垂直に近い。遺物は、磁器の細片が2点だけで、詳細な時期は不明である。

(3) III期の遺構(図14、図版1)

段丘崖に由来する段差が存在する他、平坦面の南よりの部分で、ピットが2基確認されている。組み合うピットは、確認されておらず、性格は不明である。ピット6では、礫が据えられており、礫石の可能性も考えられる。ただし、ピット6とピット22も、段差に極めて近い場所にあり、この場所に建物等が存在したか疑問が残る。

【段差】

5列より北側の、段丘崖に由来する段差は、斜面に2~5層が堆積したことによって、傾斜がⅠ・Ⅱ期段階よりもゆるくなっている。4列より南側の、Ⅱ期に石垣が存在した部分は、石垣前面の堆積層によって埋まっている。北側と比べると傾斜が強く、そのためこの部分は西側に入り込んだ形となっている。

5. 出土遺物

出土遺物量は、さほど多くない。良好な一括資料と言えるような出土状況を示す遺構・層序もない。ほとんどの種類の遺物は、1層・擾乱からの出土が最も多い。そのような中で、比較的集中して遺物が出土しているのは、1号遺構、石垣前面堆積層、IV層があげられる程度である。

(1) 繩文土器・土師器(図19、図版10、表4・6)

ごく少量ではあるが、近世以前の遺物が出土している。縄文土器1点と古代の土師器1点である。いずれも、近世以降の層序からの出土で、本来の位置を保ったものではない。

縄文土器は、2片に分かれているが、同一個体の破片で、外面には細かなRし縄文が施されている。小片であるため、細かな時期は不明とせざるを得ないが、縄文が細かいことから、縄文時代後期あるいは晩期、あるいは弥生時代のものであろう。

川内地区では、4ヶ所で縄文時代や弥生時代の遺物が出土している。川内南キャンパスの二の丸第4地点では、石器が出土している(年報5)。川内北キャンパスの武家屋敷地区第4地点では、江戸時代以前に遡る自然の沢状の落ち込みが検出された。その埋土最上部から、縄文時代中期前葉・弥生時代前期後半から中期中頃にかけての、縄文土器・弥生土器と石器が出土している(年報13)。武家屋敷地区第7地点では、縄文時代と思われる縮しづ穴が検出され、石器も出土している(年報19)。武家屋敷地区第8地点でも、石器が出土している(年報20)。まとまった遺構は未発見であるが、二の丸や武家屋敷の造営で破壊されてしまった可能性も考えられる。いずれにしても、これらの時期において、川内地区が生活の舞台となっていたと考えられる。

土師器は小片のため、写真のみを示した。外面ロクロ調整、内面はミガキを施して黒色処理した、内黒土師器の环である。小片のため、細かな時期は不明であるが、平安時代のものと考えられる。

川内地区のこれまでの調査では、古代の遺物は、2ヶ所で出土している。川内南キャンパスの二の丸第6地点では、ロクロ土師器の壺が1点出土している(年報3)。川内北キャンパスの二の丸北方武家屋敷地区第4地点では、軒平瓦1点・平瓦2点・須恵器1点が出土している(年報13)。

(2) 磁器・陶器 (図18・19、図版9、表2・3・7・8)

磁器・陶器とともに、1層擾乱から出土したものが最も多い。それ以外で、ある程度の量がまとまって出土しているのは、2層、IV層、石垣前面堆積層、1号遺構などである。しかし、これらの層序・遺構から出土した磁器・陶器の内容は、異なる時代のものが混在しており、時期的に限定できる一括資料と言えるものではない。そのため、1層擾乱以外の層序や遺構から出土したものについては、ある程度特徴が判明する資料を図示した。1層擾乱出土のものは、特殊な資料のみを図示した。

【磁器】

磁器では、1層擾乱以外から出土した資料は、細片がほとんどで、特徴が判明する資料は少ない。図示した資料は6点のみである。

C J 1～3が1～3号遺構埋土出土の資料であるが、遺構から出土した磁器で、図示できるのはこの3点だけであった。年代を詳細に限定することはできなかった。C J 4は石垣前面堆積層出土のもので、紅猪口とした。紅猪口と分類するには、器形が深いため、小坏とすべきか判断に迷ったが、型打で作られている点から紅猪口と分類した。石垣前面堆積層からは、18～19世紀代の各時期の遺物が混在していたため、この資料が石垣前面堆積層の形成時期を示すものではない。C J 5はII b層出土の小型筒形碗で、19世紀代に下るものであろう。C J 6は1層擾乱出土の広東碗である。仙台城跡の二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区では、広東碗の出土例が少ないと想定しておいた。

【陶器】

陶器でも、1層擾乱以外から出土した資料は、細片がほとんどで、特徴が判明する資料は少ない。図示した資料は13点のみである。

C T 1は2号遺構、C T 2はピット19出土で、I期の遺構から出土した陶器の中で、図示し得たのはこの2点のみである。いずれも漸戸・美濃産で、18世紀代のものと考えられる。C T 3～5は1号遺構出土のもので、幕末ころのものと考えられる。C T 6は石垣裏込め部分から出土した擂鉢で、東北産の可能性がある。裏込め層の上面から出土しており、確実に石垣構築時に遡るか否かは問題が残る資料である。C T 7はV層出土の志野の向付である。V層が形成されたのは18世紀以降に下るため、本来の位置を保ったものではないが、江戸時代初頭に調査区の付近が使用されていたことを示すものであろう。C T 8はIV層出土の肥前彦削毛日文の中型丸碗で18世紀代のものである。IV層は、18～19世紀代の各時期の遺物が混在していたため、この資料がIV層の形成時期を示すものではない。C T 9～11は石垣前面堆積層出土のもので、19世紀代を中心とする。C T 12は織部の皿で、1層擾乱出土。C T 13は1層擾乱出土の火入れで、東北産の可能性もある資料のため図示した。

(3) 土師質土器・瓦質土器・軟質施釉土器・土製品 (図19、図版10、表4・9)

【土師質土器】

土師質土器は、皿が111点とやや多く出土しているが、皿以外は全てあわせても13点にすぎない。IV層でややまとまって出土している以外は、散漫な出土である。小破片が多く、全体の特徴が判明する資料は少ない。皿2点と焼塙壺1点を図示した。

図19のC H 1はⅥ層出土の皿である。底部の回転糸切り痕跡は、通常に見られる回転糸切りで、糸切り痕跡の中心が一方向に片寄り、そこから外側に抜けていく、a技法と呼んでいるものである(年報9)。口縁部内外面に炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたことが明らかである。

C H 2は、2層出土の皿である。口径10.4cmに対して、器高が1.7cmと、浅いのが特徴である。土師質土器の皿は、18世紀末以降、器高が浅くなっていく傾向が確認されており(年報9)、本資料も18世紀末以降の可能性が考えられる。

C H 3 は、ピット16出土の焼塙壺である。底部付近の破片で、外面に格子タタキが観察される。コップ状の形態で体部外面過半部に格子タタキが施される、以前の検討の際にD類とした焼塙壺の破片と考えられる。仙台藩領内に特徴的に分布する焼塙壺である。これまでの仙台城二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区の調査では、17世紀末から18世紀前葉に出土例がある（年報9）。

【瓦質土器】

瓦質土器は23点と、少ない。ほとんどは、幕末以降の層序からの出土である。擂鉢などの鉢類が多くを占める。いずれも小破片で、特徴が判明するものは極めて少ない。特徴的なもの2点を図示した。

図19のC G 1 は、1号造構出土の火鉢と思われるもので、外面に鱗状の細かな文様が施される。C G 2 は底部の中央に径1.8cm程度の孔を有し、植木鉢と考えられる。1層攪乱からの出土で、近代に下る可能性も残る。

【軟質施釉土器】

軟質施釉土器では器種の判明するものは、全て焰烙である。仙台市の堤で作られた製品で、幕末以降に普遍的に認められるものである。図示したのは1号造構から出土した1点のみである（図19-C N 1）。焰烙の取っ手部分で、透明釉が施されている。

【土製品】

鎌が2点、上人形3点が出士しているだけである。いずれも小破片で、詳細が判明するものではなく、図示したものはない。

(4) 瓦（図20、図版10、表5・10）

瓦は、破片では近世のものと近代のものが区別できないことがほとんどのため、一定の基準を設けて、現地において選別して、採集している。今回の調査では、1層・攪乱出土のものについては現地で選別した。選別する基準はこれまでと同じで、軒瓦、長さと幅が判明するもの、刻印や線刻などがある特殊なものを選別して採集している。

瓦の出土量は全体でも6kg程度で、1層・攪乱出土のものを割り引くと、5kgにも満たない量であり、出土量は少ないと見える。近世の瓦には、様々な種類があり、破片では細かな種類を決定できないため、類型化して集計している。分類基準は、年報18で示しているが、判明する内容に応じて類型化している。平瓦1類としたものは、反りがあるもので、平瓦・野平瓦・棟瓦・軒瓦瓦の一部であるものを含む類型である。板瓦瓦のような平坦なものとは区別した類型である。今回出土した瓦は、いずれの類型も少量で、特に多い種類はない。軒瓦は出土しておらず、瓦の特徴から細かな時期を推定できるものはない。両面に線刻のあるものと、刻印のあるものを図示した。いずれも1層・攪乱出土のため、明治時代に下る可能性もある。

(5) 金属製品（図20、図版10、表4・11）

金属製品としては、銅製品では古銭が2点出土している他は、鉄製品である。鉄製品では、和釘、火箸、小刀などが出土している。和釘以外の鉄製品では、確実に江戸時代に遡る層序から出土したものはない。古銭2点のみを図示した。いずれも寛永通宝で、新寛永である。

(6) その他の遺物（表4）

それ以外の遺物はきわめて少ない。木製品は、4層から杭と樋が各1点出土しているだけである。漆塗製品は、漆椀が2点出土しているが、いずれも1層からの出土であった。石製品は、火打石1点と不明石製品が出土しているが、これらも1層からの出土であった。植物遺体ではクルミが2層から1点、動物遺体では貝が1層・攪乱から2点出土している。岡化した遺物はない。

6.まとめ

今回の調査地点は、段丘崖のすぐ上という、やや特殊な場所であった。検出されたそれぞれの遺構の性格は、ほとんど明らかにできなかった。ただし、崖敷の中心的な施設が、段差にかかる位置に造られることは考え難いことから、検出された遺構は、付隨的な施設であると考えて良いであろう。

今回の調査区で検出された段丘崖上の平坦面の標高は、場所によって若干異なるが、おおむね54.4m前後である。調査区東側の明治時代に造られた石垣の下端の標高は、おおむね50m前後である。当年度に実施した石垣改修工事に伴う立会調査の際の観察では、この明治時代の石垣の下端が、おおむね江戸時代の地表面の高さに近いものと考えられる。これらの点から、江戸時代の段丘崖の段差部分の高さは、4m程度あったと推定される。江戸時代には、東西方向の道路である中ノ坂通が、今回の調査区付近で段差を横切っていたと推定される。4mの比高差でかなり急斜面の段差であり、これを道路が東西に横切る際には、切り通し状に掘り下げるなど、何らかの形で傾斜を緩くするための工事を行っていたはずである。今回の調査では、中ノ坂通に関わると断定できる遺構は検出されていない。ただし、Ⅱ期の石垣を伴う削り込みなどは、道路周辺の施設である可能性も残っており、今後さらに検討していく必要がある。

今回の調査では、確実に江戸時代初頭に遡る遺構は検出されていない。ただし、江戸時代初頭に遡る志野の向付が出土しており、調査区の付近が江戸時代初頭に使用されていたことを示すものであろう。二の丸北方武家屋敷地区においては、江戸時代初頭に遡る遺構や遺物が、これまでに実施したほぼ全ての調査において検出されている。このことから、川内北キャンパス周辺の区域では、江戸時代初頭に、広範囲にわたって屋敷の整備が進んでいたものと考えられる。

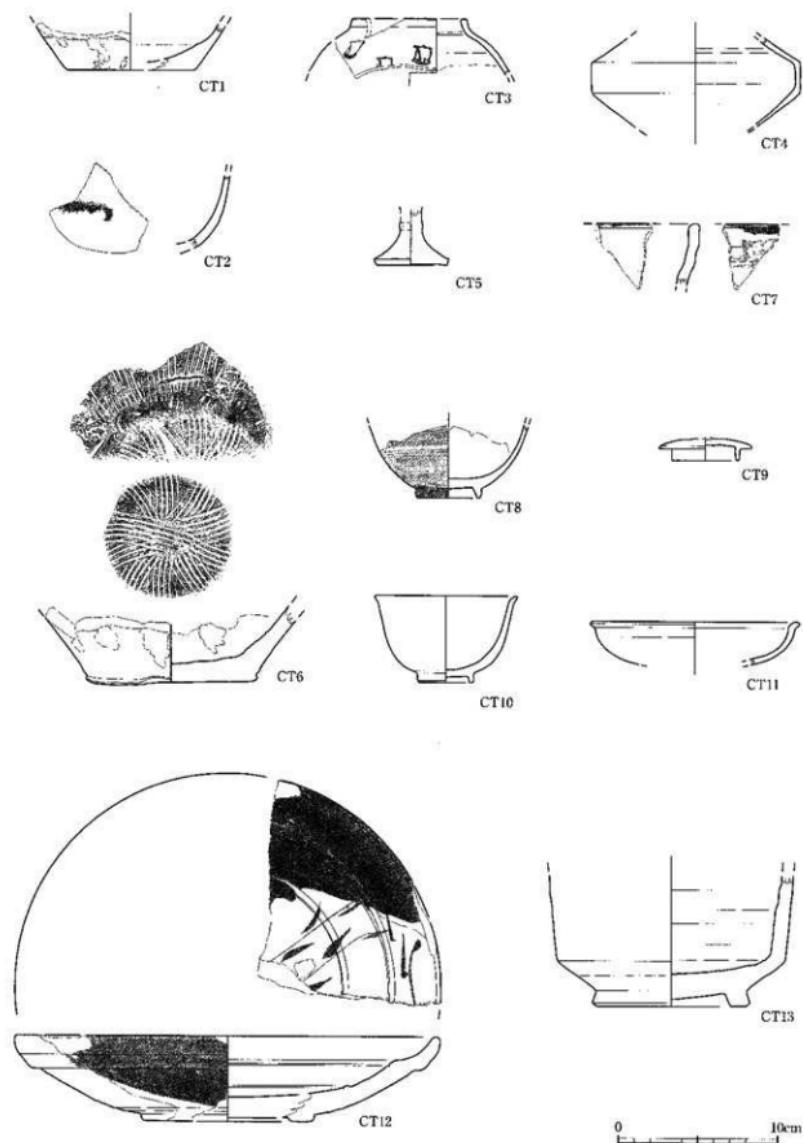


图18 武家屋敷地区第9地点出土陶器
Fig.18 Glazed ceramics from BK9

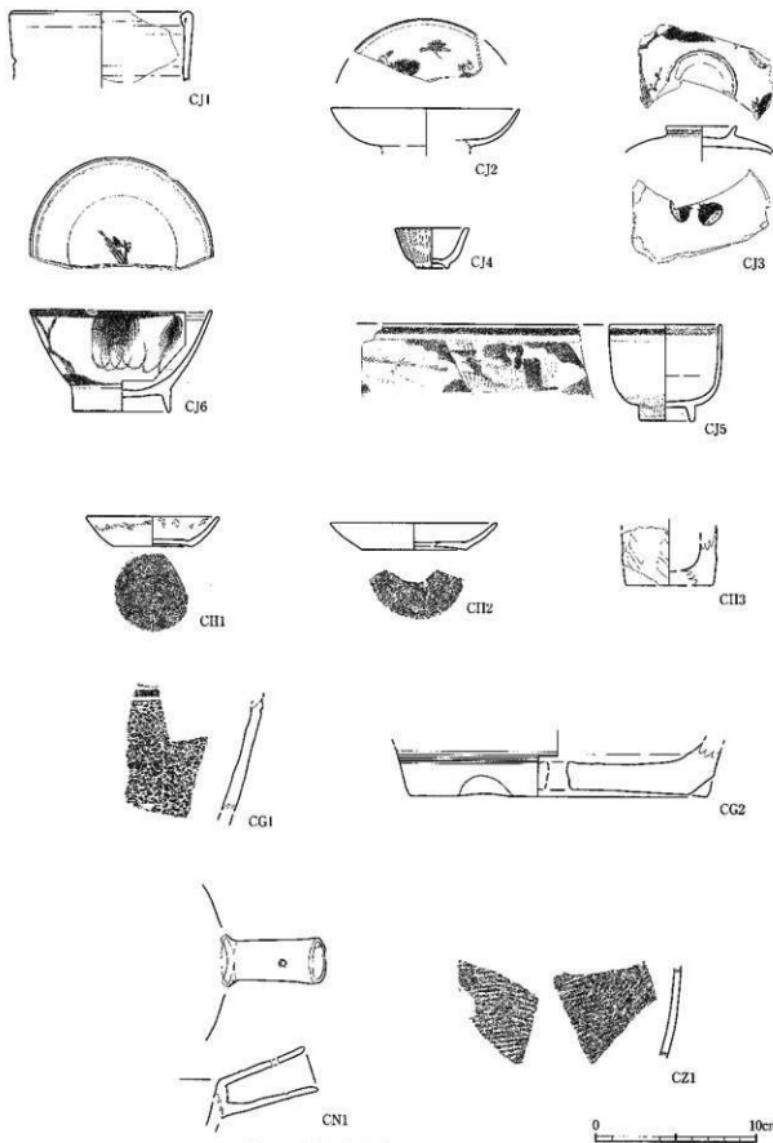


图19 武家屋敷地区第9地点出土瓷器·土器
Fig.19 Porcelains and ceramics from BK9

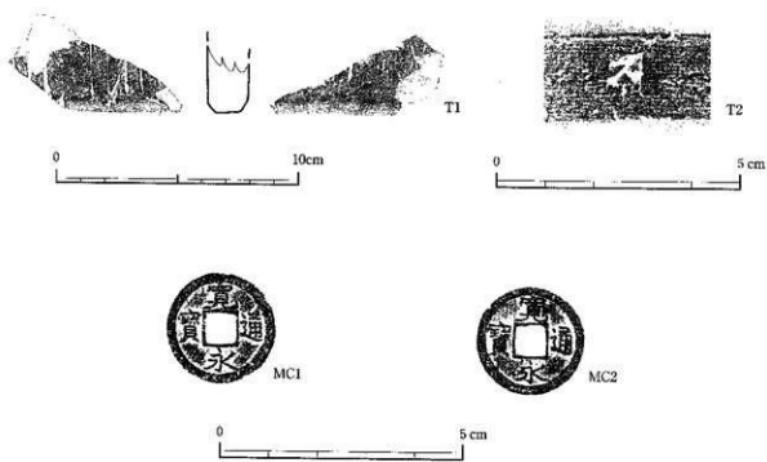


图20 武家屋敷地区第9地点出土瓦·古钱
Fig.20 Roof tiles and coins from BK9

表2 武家屋敷地区第9地点出土器物集計表
Tab.2 Distribution of porcelains at BK9

層・造構	大 鏡	中 鏡				小 鏡				面 鏡				袋 物				其 他				不明	合 計
		丸 形	端 反 折	裏 の 他	不 明	丸 形	端 反 折	裏 の 他	不 明	小 鏡	中 鏡	大 鏡	不 規 則 鏡	鉢	瓶	袋 類	其 他	不 明	蓋物	その他の 袋物	不明		
不明		2																					1
I層・掘孔	2	35	7	4	2	4	6	5	14	38	5			3	小瓶1	燭台3	12	身2 蓋1	小杯7 孫口2 紅碧口1 仏壇器2 盤1	6	16		
2層	4		1	1	1	1	2	2	10		4							身1	小杯1	2	39		
3層	2										1							身1	仏壇器1		3		
4層	2									2		1	1								1		
II層	2					2	1			3		1			小瓶1				段直蓋1		1		
古窓	3		1	2	1			1	3		5									1	18		
V層	1																				1		
壁附	3									3	2										3		
石垣前面堆積上	11		1	1	1	1		4	7	11	1	小瓶1		5	身3 蓋1	紅碧口2、 合子蓋1	3	54					
1号造構	3	1						3	1		4										15		
2号造構										1											1		
3号造構	1																				6		
1号佛	1																				2		
ピット1																					1		
ピット7																					2		
ピット9																					1		
ピット11																					1		
合計	2	70	8	5	5	10	3	9	1	7	23	1	71	5	30	6	3	3	23	9	20	18	332

表3 武家屋敷地区第9地点出土陶器集計表
Tab.3 Distribution of glazed ceramics at BK9

層・造構	大 鏡	中 鏡				小 鏡				面 鏡				袋 物				其 他				不明	合 計	
		丸 形	端 反 折	裏 の 他	不 明	大 鏡	小 鏡	中 鏡	鉢	瓶	不 規 則 鏡	身 蓋	火 入 吹	袋 物	土 器	灯 道 具	その他の 袋物	不明						
不明					1																		1	
I層・掘孔	30	2	5	16	2	2	1	6	4	6	大鉢2 植木鉢1	29	4	2	10	25	4	1	2	1	5	灯明皿1	小杯1 水呑1 仏壇器1 水滴1 行平蓋1	166
2層	4	1	6	11		3	1	2		3	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	45	
3層			3					1														5		
4層	1		1	1					鉢類1	1	7	4									1	18		
II層	1		3								1	3										8		
IV層	3	2	3	6	1	4	2	1	1	大鉢1 鉢類1	15	2	1	6	1	1	3			水差1	3	38		
V層											2									尚存1		3		
石垣前面堆積層	3	1	2	8	4	4	4	1	3	大鉢2	17	2	3	1	1	1	1					10		
石垣裏																						4		
1号造構	6	4	1	3	2	1	4	4	鉢類3	9	2	1	1	9	1	1	1	2	1		仏壇器1	2	59	
2号造構									1													3		
3号造構								1														1		
ピット1																						1		
ピット6											1											1		
ピット7																						1		
ピット9		2																				1		
ピット17					1																	1		
ピット19		1						1														2		
合計	32	7	5	10	49	10	25	1	20	7	23	12	77	12	3	28	50	7	3	6	11	7	2	914
																							451	

表4 武家屋敷地区第9地点出土器・その他の遺物集計表
 Tab.4 Distribution of unglazed ceramics and various implements at BK9

層・遺構	土師質土器			灰質 火鉢			瓦質土器			鐵製品			本製品			漆 漆			陶文土器			土器類			合計
	直	横 縦 鉢	鉢 鉢	不 明	不 明	火 鉢	鉢 鉢	その他の 鉢	不 明	上 製品	十人形	古 銅	和 釘	その他	本製品	石製品	遺存体	陶文土器	土器類	陶文土器	土器類	陶文土器	土器類		
不明	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	火箸1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I層・亂れ	18	-	-	2	8	1	2	5	植木鉢1:	3	鉢1	不明3	-	-	-	-	2	火打石1	貝2	-	-	-	-	51	
2層	-	-	6	-	-	-	2	-	植木鉢1	1	-	-	-	-	-	-	-	不明1	タルミ1	1	12	-	-	-	
3層	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
4層	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	
Ⅱ層	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	小刀1	-	-	-	-	-	2	
Ⅳ層	47	-	1	3	3	1	-	-	蓋1	1	-	-	-	-	-	-	-	不明1	-	-	-	-	-	60	
V層	-	-	5	-	-	1	-	-	炭塊1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
VI層	-	-	7	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	
丘頂前面埴物層	14	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明1	-	-	-	-	-	1	
I号造拂	-	-	-	-	-	2	-	-	1	炭塊1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	
3号造拂	-	4	-	1	-	-	-	-	1	炭塊1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	
ピット6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
ピット9	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	
ピット11	-	5	-	2	-	-	-	-	鉢1	-	-	-	-	-	-	-	-	不明1	-	-	-	-	-	9	
ピット16	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
合計	117	1	1	10	22	2	3	7	7	6	2	3	2	5	6	2	2	2	2	3	1	1	1	100	

表5 武家屋敷地区第9地点出土瓦集計表
Tab5 Distribution of roof tiles at BK9

層・造構	平瓦1枚			焼瓦			丸瓦類			その他			小明			合計		
	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量	点数	重 量
I層・機械			1	1,350							1	35				2	1,385	
2階	1	148											1	1	2	149		
Ⅲ層					1	45							1	13	2	58		
Ⅳ層	7	563											2	20	10	790		
V層	1	100											1	11	2	111		
VI層	1	310													1	310		
VII層	2	154													2	154		
石塀全面地積層	2	166							1	882					3	1,047		
I分造構	5	344	1	1,465				1	65						7	1,874		
ピット11					1	30									1	30		
ピット17								1	120						1	120		
合計	19	1,784	2	2,815	2	75	41	1,274	1	35	5	45	33	6,098				

表6 武家屋敷地区第9地点出土绳文土器・土師器觀察表
Tab.6 Notes on Jomon pottery and Haji ware at HK9

登録番号	種類	出土場所	器種	時期	器厚 (mm)	調査等	施考	図 版
C2001	鐵文上器	C4	石頭南面堆積層	保鉢	桃文晚期?	4.0 外陶: RL桃文 内面: ナデ		19 10
C2002	上部器	D6	2層	环	平安時代	3.0 外陶: ロクロナデ 内面: ミガキ、黒色処理	- 10	

表7 武家屋敷地区第9地点出土磁器觀察表
Tab.7 Notes on porcelains at BK9

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様等	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ001	3号遺構埋土	青炉	11.4	—	青磁	普通	肥前	不明	—	—	19	9
CJ002	2号遺構埋土	小中皿	11.8	—	—	草花文	普通	肥前	17c後～18c前	—	19	9
CJ003	1号遺構南面埋土1層	蓋	—	—	—	栗文 内面栗文	普通	肥前	18c?	—	19	9
CJ004	C3 石垣前面埴居	紅焼口	4.7	2.1	2.5	白龍頭打	普通	肥前	不明	—	19	9
CJ005	II b型	小型筒形碗	7.1	3.5	6.0	一尾山水文	普通	肥前	19c前～中	—	19	9
CJ006	I号掘孔	中型炉 東鏡	11.4	6.1	6.4	梅文 見込み模文	普通	肥前	18c末～19c中	燒過	19	9

表8 武家屋敷地区第9地点出土陶器觀察表
Tab.8 Notes on glazed ceramics at BK9

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様等	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版		
CT001	2号遺構埋土	器蓋不明	—	8.0	—	露胎(茶褐色)	粗	鹿戸・美濃	18c?	—	18	9		
CT002	ピット19	中型丸碗	—	—	—	綠釉掛け流し	粗	青磁(淡黄色)	普通	鹿戸・美濃	18c前半	18	9	
CT003	1号遺構埋土1層	土瓶(身)	7.1	—	—	白泥鉄輪軋掛舟文	灰釉(灰褐色)	密	人頭輪點?	19c中	—	9		
CT004	1号遺構埋土1層	土瓶(身)	—	—	—	灰釉(淡灰白色)	密	大瓶相馬	19c前～中	買入顕著	18	9		
CT005	1号遺構埋土1層	灰瓶	—	4.4	—	—	青白	密	—	—	18	9		
CT006	石垣裏込	桶鉢	—	10.6	—	—	鐵胎(茶褐色)	粗	東北窯	18c～19c	沖繩(琉球)	18	9	
CT007	V層	丼付	—	—	—	鐵胎	長石釉	やや粗	美濃	16c末～17c初	志野	18	9	
CT008	IV層	中型丸碗	—	4.0	—	白泥鉄輪目	灰釉(青褐色)	密	肥前	18c	—	9		
CT009	石垣裏込埋土	蓋	4.2	—	—	長石波浪(白褐色)	密	大瓶(淡青白)	大瓶相馬	19c前～中	人頭輪	18	9	
CT010	石垣前面埴居	小碗踏端	8.9	3.5	5.5	—	—	—	—	先駆期	—	9		
CT011	石垣前面埴居小中皿	—	13.1	—	—	灰釉(明褐色)	密	東北窯	19c前～中	—	18	9		
CT012	1層復元	人皿	26.6	10.7	5.3	露胎(灰褐色)	粗	鹿戸(灰褐色)	やや粗	鹿戸	17c前	鐵部	18	9
CT013	1層復元	火入	—	9.4	—	—	鐵胎(黑色)	粗	東北窯?	—	18c後～19c	—	9	

表9 武家屋敷地区第9地点出土土師質土器・瓦質土器・軟質施釉土器觀察表
Tab.9 Notes on unglazed ceramics and lead glazed soft ceramics at BK9

登録番号	種類	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面	外面	底部外周	同款	備考	図	図版
C1001	土師質	B5 8層	瓶	8.3	4.9	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	同款系切無調査a:右	口沿内外面に氯化物化粧	—	19	10
C1002	土師質	C5 2層	瓶	10.4	6.7	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	同款系切無調査	不明	—	19	10
C1003	土師質	ピット16埋土	燒造壺	—	5.3	—	不明	—	熱了貝タキ	不明	—	19	10
CG001	瓦質	1号遺構南面埋土+2層	鉢類	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	底部外周に幾つかの文様	19	10
CG002	瓦質	1層復元	植木鉢	—	18.6	—	ロクロナデ	ロクロナデ	同款系切無調査	小明	—	19	10
CN001	軟質施釉	1号遺構南面埋土+2層	燒造	—	—	—	—	—	—	—	胎體 肥厚部分のみ	19	10

表10 武家屋敷地区第9地点出土瓦觀察表
Tab.10 Notes on roof tiles at BK9

登録番号	出土場所	種類	備考	図	図版
T001	1層復元	その他	両面に筋目あり	—	20 10
T002	1層復元	桃瓦	刻印 ス?	—	20 10

表11 武家屋敷地区第9地点出土古錢觀察表
Tab.11 Notes on coins at BK9

登録番号	出土場所	銭名	外径 (mm)	穿径 (mm)	重さ (g)	備考	図	図版
MC001	ピット6	寛永通宝(新寛永)	23	6	1.8	完形	—	20 10
MC002	不明	寛永通宝(新寛永)	22	6	2.0	完形	—	20 10

第Ⅲ章 富沢芦ノ口遺跡第6次調査(TM6)

1. 芦ノ口遺跡の立地と歴史

芦ノ口遺跡は、仙台市南部の三神峯丘陵の北側に位置している(図1)。

東北大富沢地区は、理学研究科附属原子核理学研究施設と職員宿舎として利用されている。富沢地区は、隣接する三神峯公園とともに、敗戦までは陸軍幼年学校が置かれていた。戦後、幼年学校の建物を利用して、東北大の教養部として使用された。その後、1963年に現在の原子核理学研究施設が建設されている。

三神峯丘陵は、65m前後の標高で、丘陵の南東側は沖積平野となっている。この丘陵と平野の境界線が、長町-利府線にある。長町-利府線は、仙台市太白区長町から宮城郡利府町にかけて、北東-西南方向に約17kmにわたって延びるもので、北西上がりの逆断層と考えられている(中田高ほか1976)。長町-利府線の北西側には、大年寺断層と鹿落坂断層が併行して走っており、副断層を形成している。大年寺断層は、南東上がりの逆断層である。この長町-利府線と大年寺断層にはさまれた、幅約1km弱、長さ約8kmの範囲は、降起帯を形成しており、三神峯丘陵はこの隆起帯に相当する。三神峯丘陵と東北大富沢地区との間の急斜面は、大年寺断層によって形成された低断層崖にあたる。

三神峯丘陵上の平坦面は、台の原段丘に相当し、芦ノ口遺跡周辺は上町段丘に相当すると考えられる(中川久夫1998)。芦ノ口遺跡周辺は、三神峯丘陵上の平坦面より一段標高が低く、調査地点では50~54mである。現在の富沢地区構内は、ほぼ平坦に造成されているが、本来は三神峯丘陵の裾から北側の金洗沢に向かって、緩やかに傾斜して下っていく地形であったと考えられる。

芦ノ口遺跡の周辺は、数多くの遺跡が存在することが知られている。三神峯丘陵一帯にひろがる三神峯遺跡は、縄文時代前期の集落跡として古くから知られており、住居跡も発見されている(岩渕康治ほか1980)。丘陵の南西端には、円墳2基からなる三神峯古墳群が存在し、埴輪も採集されている(藤沢敦1998)。三神峯丘陵北側の金洗沢沿いには、上手内横穴墓群(主浜光朗ほか1992)が存在するほか、周辺には多くの古墳や横穴墓群が存在している。

芦ノ口遺跡の今回の調査では、古墳時代前期の粘土探掘坑が発見されている。知られている同時期の集落遺跡で、最も接近するものは、金洗沢の北側に所在する上手内遺跡である。上手内遺跡では、古墳時代前期と中期の住居跡が発見されている(主浜ほか1992)。

三神峯丘陵とその周辺は、窯業生産が盛んに行われた地域としても著名である。古墳時代の埴輪窯跡である富沢窯跡(5世紀、渡辺泰伸ほか1974)、須恵器窯跡である金山窯跡(5世紀、斎藤秀寿1981)や上手内窯跡(7世紀、主浜ほか1992)が知られている。

2. 調査経緯

(1) 2002年度までの調査

芦ノ口遺跡は、1976年に野球場建設に伴い発見された。工事開始前に雑木を伐採した際に土器片が発見されたことから、急速東北大の文学部考古学研究室が調査担当となって、試掘調査が実施された。その結果、平安時代の堅穴造構などが発見され、土師器・須恵器・須恵系土器が多数出土したほか、縄文時代・弥生時代の土器や石器も出土した(年報3)。この調査結果を受けて、野球場は位置を西側にずらして建設されることとなった。

その後、原子核理学研究施設の施設拡充計画に伴い、1985年度(TM1)・1989年度(TM2)・1991年度(TM3)の3次にわたって、遺跡の範囲・性格を確認するための試掘調査を実施した(年報3・9)。その結果、密度は低いものの、各所で縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物が確認された。これにより、富沢地区の

全域を含む形に、周知の遺跡の範囲が拡大されている。また、縄文時代を遡る時期の埋没林が、下層に存在することも明らかとなった。

第4次調査（TM4）は、原子核理学研究施設の電源室と照射・測定室の新設と、排水管改修工事に伴って、1996年度に実施された（年報14）。1区からは縄文時代晚期前業の粘土探掘坑12基などが発見された。2区では、埋没林が良好な状態で検出されている。排水管区からは、古代の堅穴住居跡が検出されている。

2001年度に実施した第5次調査（TM5）は、第4次調査の2区に予定されていた建物が変更となり、当初予定より規模を拡大して実験棟を建設することとなったため実施した（年報19）。第4次調査2区の北側と西側に隣接した区域を調査し、粘土探掘坑の可能性が考えられる土坑10基などが発見された。土坑からは古墳時代前期の埴輪土師器が出上しており、第4次調査1区とは時期が異なり、古墳時代前期の粘土探掘坑が存在することが明らかとなった。

（2）調査地点の位置

今回の工事対象区域は、富沢地区のほぼ全域の広い範囲にわたるが、発掘調査を実施したのは1ヶ所だけである。グランドとの境に近い、第3次調査のN12区の周辺である（図21）。第5次調査地点からは、南西に40m前後の場所にあたる。今回調査を実施した範囲の西端から西に約15mのところには、3次調査のN13区がある。N13区では、全面が擾乱を受けており、コンクリート廃材が2m以上の深さまで埋められていることが確認されている（年報9）。

（3）調査の方法と経過

富沢地区的原子核理学研究施設の建物では、生活排水が浄化槽を経由して雨水系統に排出されていた。これら浄化槽を完全に廃止し、公共下水道に接続する必要となった。そのため、研究施設のほぼ全域で、屋外排水管を設置し直す工事が実施されることとなった。

工事範囲は広範囲にわたるが、既存建物に沿って布設される区域については、建物建設時の基礎掘削により、すでに掘削されている可能性が想定された。また、これまでに実施してきた試掘調査（1～3次調査）の結果から、研究施設建設時の造成によって削平されている区域も多いものと推定された。そのため、工事での掘削時に立会調査を行い、遺構・遺物が検出された区域について、記録保存のための本調査を実施することとした。

遺構が検出されたのは、第3次調査の際に土坑群が検出されている、N12区の周辺であった。表土を重機で除去し、遺構が発見された範囲を本調査の対象とした。調査区の西よりの部分が一部広くなっているが、マンホール部分で掘削範囲が広い箇所である。結果的に本調査を実施したのは、24.5m²であった。この区城以外では、掘削時の立会調査によって、遺構・遺物は発見されていない。

3. 検出遺構（図22・23、図版11・12）

第3次調査N12区の東側で3基、西側で4基、合計7基の土坑が発見された（図22）。N12区の調査では、1号～7号土坑の遺構名称が使われていた。今回は、これに統けて、東側から順に8号土坑～14号土坑の遺構名称を付した（図23）。

いずれの土坑も、埋土には、地山に由来するブロックが混じる土と、自然堆積と考えられる植物遺体を含む黒褐色～暗褐色のラミナ状の堆積土があり込む。この埋土の様相は、N12区の1～7号土坑と同様である。

【8号土坑】

南北両側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、不整形を呈すると推定される。南北90cm以上、東西の最大幅180cm、深さ54cmである。東側の壁は大きくオーバーハングしており、底面には凹凸がある。土

- [横線] 第1次調査区 (TM 1)
- [縦線] 第2次調査区 (TM 2)
- [斜線] 第3次調査区 (TM 3)
- [点線] 第4次調査区 (TM 4)
- [太線] 第5次調査区 (TM 5)
- [太斜線] 第6次調査区 (TM 6)
- [太点線] 2003年度の立会調査区

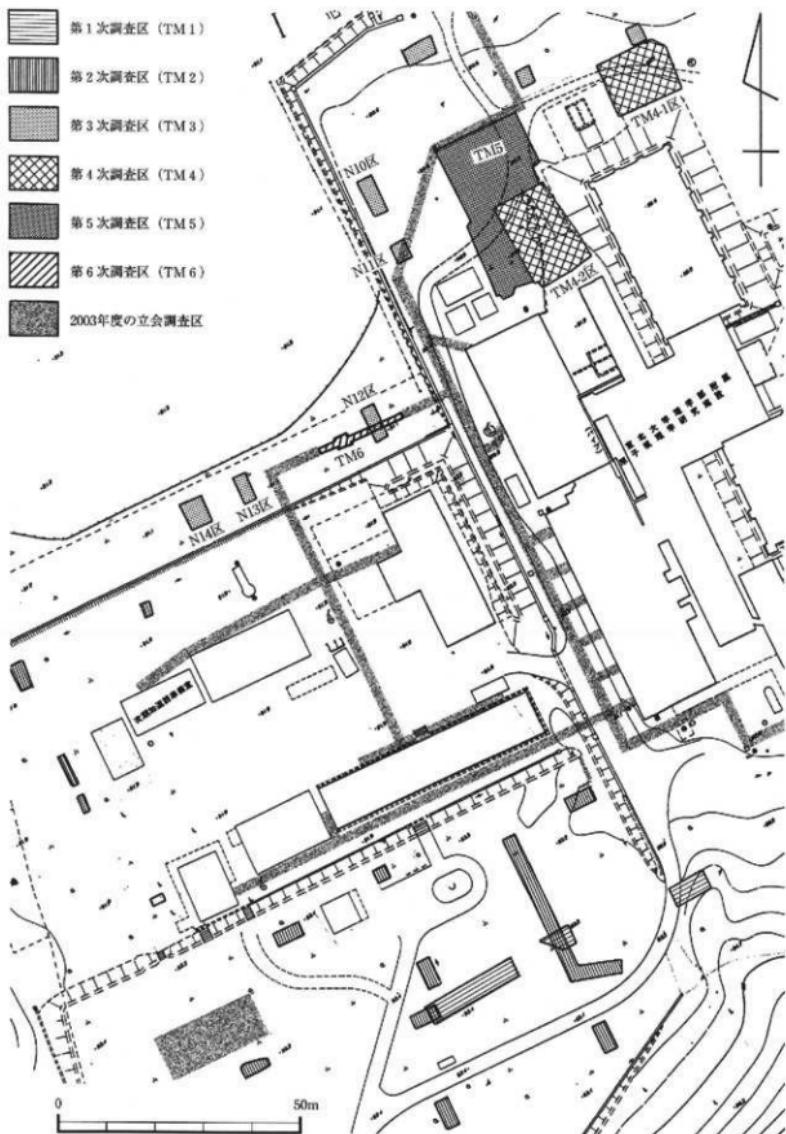
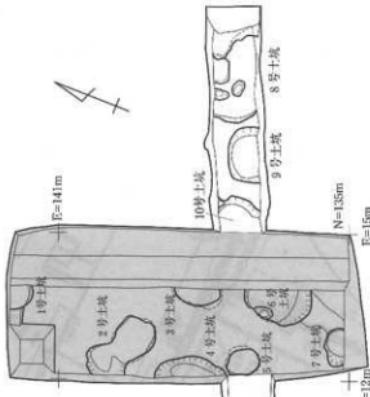


図21 芦ノ口遺跡第6次調査区の位置
Fig.21 Location of TM6

第3次調査 N12区



第6次調査

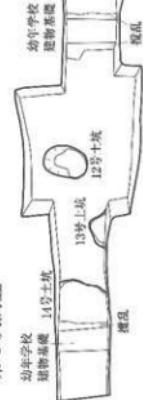


図22 舞ノ口遺跡第6次調査遺構配置図
Fig.22 Distribution of excavations at TM6

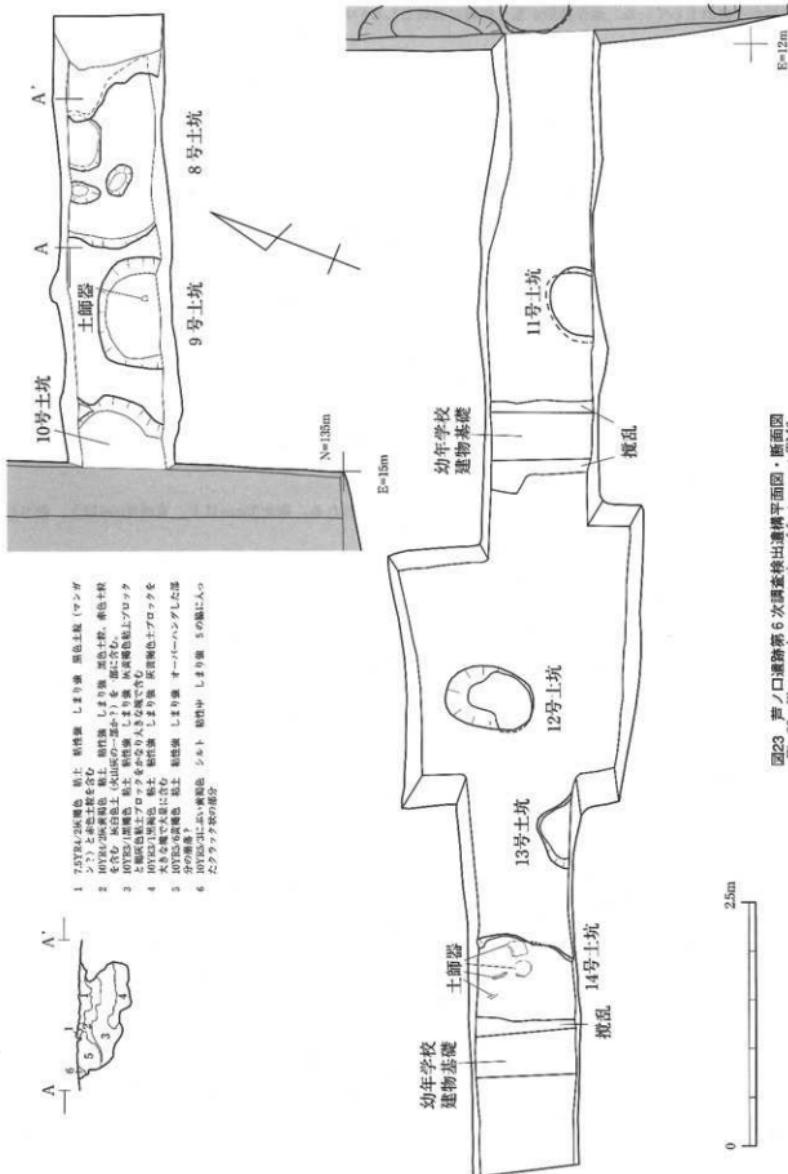


図23 芦ノ口遺跡第6次調査検出遺構平面図・断面図
Fig.23 Plans and cross section of features at TM6

師器が1点出土している。遺存状態が悪く詳細は判然としないが、壺か甕の体部破片の可能性がある。

【9号土坑】

南側が調査区外へ延びるが、隅丸方形に近い形状を呈する。南北65cm以上、東西の幅は115cm、深さは50cmである。土師器が2点出土しているが、同一個体と考えられる。小片のため確実ではないが、比較的大型のものと考えられることから、壺の体部破片の可能性がある。

【10号土坑】

南北とも調査区外へ延び、西側は陸軍幼年学校建物の基礎により壊されている。東辺はやや不整形を呈する。南北85cm以上、東西115cm以上、深さは53cmである。土師器が1点出土している。大型の底部付近の破片である（図24-C Z 1）。

【11号土坑】

南側が調査区外へ延びるが、梢円形を呈すると思われる。南北45cm以上、東西の幅は70cm、深さ53cmである。北側から西側にかけては、壁が若干オーバーハングする。遺物は出土していない。

【12号土坑】

今回検出された土坑の中では、唯一全体の形状が判明する。確認面の形状はほぼ梢円形を呈し、南北の長径90cm、東西の短径65cm、深さ46cmである。下部は不整形で、南北側の壁はわずかにオーバーハングする。遺物は出土していない。

【13号土坑】

南側が調査区外へ延び、ごく一部の検出に留まるものと思われる。南北35cm以上、東西80cm以上、深さは25cmである。遺物は出土していない。

【14号土坑】

南北とも調査区外へ延び、西側は陸軍幼年学校建物の基礎により壊されている。東側は緩やかな弧状を呈する。南北100cm以上、東西90cm以上、深さは33cmである。東側の壁は、一部がオーバーハングする。東壁に近いところで、土師器の壺がまとまって出土している。全て同一個体と考えられる。底部を欠くが、口縁部から体部までが残存する（図24-C Z 2）。

4. 出土遺物（図24、図版13）

8号・9号・10号・14号土坑の4ヶ所から、それぞれ1点づつ土師器が出土しており、合計で4点となる。8号土坑出土の土師器は、器種は不明であるが、壺もしくは甕の体部破片の可能性がある。9号土坑出土の土師器も、破片のため器種は不明であるが、大型の壺の体部破片の可能性がある。10号土坑出土のものは、土師器の壺の底部付近である。14号土坑出土のものは、土師器の壺で、底部付近は残っていないが、口縁部から体部が残存している。いずれも保存状態は悪い。

丹ノ口遺跡では、これまでの調査において出土した上器類は、縄文土器・土師器に関わらず、概して保存状態が悪い。第4次調査で出土した縄文土器では、取り上げて乾燥が進むと、亀裂が進行して、反って変形していくという現象が顕著に見られた（年報14）。このような変形がおこる原因は、明らかとなっていたいなかった。今回の調査時の観察から、その原因がある程度推定できるようになった。

調査地点の土壤は粘土質土壤で、土壤の取縮率が大きいためか、乾燥が進むと収縮が激しく、多数の亀裂が形成される。一方、降雨などで水分が補充されると、土壤が膨潤し亀裂は姿を消すという現象が繰り返しあつて、10号土坑出土の土師器を取り上げるまでの間、柱状に残した埋土の上に残しておいたところ、乾燥が進み土壤に亀裂が生じた。この土壤の収縮による亀裂が、土師器にまで達して、亀裂にそって土師器が割れていた。しかし、水分が補充され土壤が膨潤して亀裂が姿を消すと、土師器もとの状態のように戻っていた。この観察

結果から、上器類が当地点に埋没している間、土壤の収縮・膨潤に運動して、亀裂が形成され、もとに戻るということを繰り返していたと考えられる。そのため、出土した時には形状を保っていても、その内部は度重なる亀裂の形成によって、細かく破壊された状態になっているものと考えられる。出土時の「水を含んだクッキー状」の時点では、かろうじて形状を留めているが、乾燥が進むと、内部が既に破壊されているため、変形して壊れていくものと推定される。したがって、原材料の粘土や焼成具合によるのではなく、埋没環境が原因である可能性が高いものと考えられる。

今回出土した上器類については、発泡ウレタンに包埋して取り上げ、アクリル樹脂のパラロイドB-72をアセトンに溶いた溶液を塗布して強化した。14号土坑出土の甕は器壁が薄く、そのままでは強度が不足するため、内面の大部分を画仙紙で裏打ちしてB-72を塗布している。

出土した土器類の内、図示できたのは2点である。

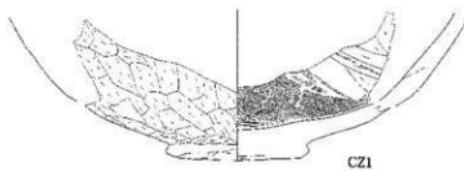
10号土坑出土のものは、土師器の甕の底部付近である（図24-C Z 1）。図示したもの以外に、同一個体の破片が1点ある。底部の復元径9.0cm、残存高9.3cm。突出した底部に、大きくひらく体部を持つ、大型の甕と考えられる。底面には、ドーナツ状の粘土紐の上に巻き上げて製作した痕跡が認められる。外面は斜め方向のケズリ調整が施されている。内面は底面付近はハケメ調整で、底面から5~6cmほどの高さのところに、粘土の接合痕が認められ、ここに製作時の単位があることが判る。継ぎ目付近から上部は、斜め方向のナデ調整が施されている。

14号土坑出土のものは、土師器の甕で、底部付近は残っていないが、口縁部から体部が残存している（図24-C Z 2）。図示したもの以外に、破片が多数存在するが、遺存状態が良くないこともあります。接合できていない。底部を除くと、ほぼ完形に近い部分が出土していると考えられる。「く」の字状に外傾する口縁部に、丸みの強い体部がつく甕である。復元口径15.8cm、体部最大径24.0cm、残存高13.7cm。体部の厚さが2~4mmときわめて薄い。体部外面には、縦から斜め方向のハケメが施され、部分的にナデも認められる。頸部付近には横方向のケズリが施されている。体部内面は横から斜め方向のナデが施されているが、保存状態が良くないため、詳細は不明である。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整である。

14号土坑出土の甕は、形態や調整技法から、古墳時代前期の塩釜式の甕である。10号土坑出土の甕も、塩釜式に属するものと見て差し支えない。塩釜式については、細分がなされ、その変遷が検討されてきた（丹羽茂1983・1985、次山洋1992、辻秀人1994・1995）。なかでも次山は、口縁部形態や体部外面調整から、甕の変遷を検討している。14号土坑出土のものは、cとされた口縁部形態に近く、次山の細分では2段階を中心とした時期に見られることが指摘されている。14号土坑から出土した土器類は1点のみのため、確実に時期を限定することは難しいが、塩釜式の中でも、比較的古い段階に属する可能性が高いと考えられる。

10号土坑出土の甕は、底部付近だけの破片であるため、全体の特徴が判明しない。そもそも大型の甕の出土例自体が少ないため、これだけの破片から絶かな縦年位置を検討することは難しい。

隣接するN12区の6号土坑から出土した土器類の鉢については（図24-参考）、明確な類例に欠けるため、坏との形態的類似という消極的理由から、古墳時代中期の引出式に属する可能性が高いものと指摘した（午報9）。今回の調査結果を踏まえるならば、前期の塩釜式期の土器類である可能性が高くなったと言えるであろう。6号土坑出土の鉢と類似した形態のものは、仙台市藤田新田遺跡D区のS I 401件居跡出土の大型の鉢があげられるが、細部形態では異なる部分もある（岩見和泰ほか1994）。該期の大型の鉢は、宮城県域では類例が極めて少なく、詳細な比較検討は難しいが、6号土坑出土の鉢も塩釜式期の可能性が高いものと考えておきたい。



CZ1

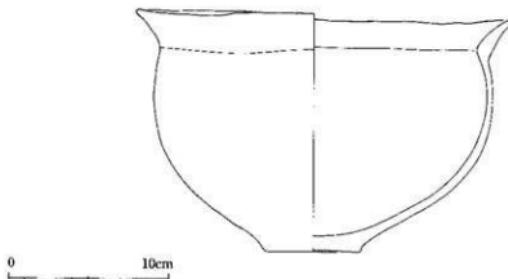


CZ2

0 10cm

歩緑番号	種 別	出土場所	法 量	調 整	胎土	焼成 回数
CZ-001	上部器・壺	10号土坑埋土	底径：9.0cm 残存高：9.3cm	外面：斜め方向ハケヅリ、内面：底面付近ハケメ・粘土接合板があり縫き目付近から上部は斜め方向のナデ	精良	13
CZ-002	七脚器・壺	13号土坑埋土	口径：15.8cm 体部最大径：24.0cm 残存高：13.7cm	体部外面：瓶から斜め方向ハケメ・器分間にナデ・底部付近横方向のケヅリ、体部内面：横から斜め方向のナデ、口縁部：内外面ともヨコナデ	良好	13

参考：3次調査N12区 6号土坑出土七脚器

図24 芦ノ口遺跡第6次調査出土土器
Fig.24 Haji ware from TM6

5.まとめ

今回は調査範囲が狭いため、土坑の全体形状が明らかとなった例は12号土坑1基のみである。そのため土坑の平面形状には不明確な部分が多いが、楕円形を基調とするものや、不整形のものがある。壁はオーバーハングするものが多い。埋土には、地山に由来するブロックが混じる土と、自然堆積と考えられる植物遺体を含む黒褐色～暗褐色のラミナ状の堆積土が入り込む。このような形態や埋土の特徴は、N12区の1～7号土坑と共通する。また、第4次調査1区で検出された縄文時代の粘土探掘坑や、第5次調査で検出された古墳時代前期の土坑群とも共通する特徴である。したがって、今回発見された8～14号土坑も、粘土探掘坑の可能性が高いものと考えられる。

今回の調査では4基の土坑から土師器が出土し、特徴の判る2例は、いずれも古墳時代前期の塩釜式のものであった。隣接する第3次調査N12区の6号土坑出土の土師器も、塩釜式に属する可能性がある。また、第5次調査区では、10基の土坑が検出され、3号土坑からは塩釜式に属する土師器甕の体部破片が出土している。第5次調査区で発見された土坑から、今回調査区の西端にある14号土坑まで、直線距離で最大75m離れている。古墳時代前期の粘土探掘坑が、この区域一帯に存在したか否かは不明であるが、第5次調査区の西側にあたる第3次調査のN10区とN11区では、粘土探掘坑と考えられる土坑は検出されていない。したがって、一面に粘土探掘坑が分布するのではなく、いくつかのグループに分かれていた可能性が高いものと考えられる。また、第4次調査1区で検出された縄文時代の粘土探掘坑は密集しているが、古墳時代前期の粘土探掘坑は、N12区付近でやや密に分布している以外は、分布はまばらである。

これまでに、芦ノ口遺跡においては、古墳時代前期の住居跡などは発見されていない。金洗沢を北側に渡った、土手内遺跡で古墳時代前期の住居跡が発見されているのが、最も近接する例である。しかし、土手内遺跡で発見されている古墳時代前期の住居跡は、塩釜式でも新しい段階と推定されており（主浜ほか1992）、14号土坑出土の甕とは年代が合わない。両遺跡の遺構の年代幅が、現在知られているものに限定される訳では無いが、現状では両者を直接関係付けることはできない。

古墳時代の粘土探掘坑群の検出例は、全国的にきわめて少なく、芦ノ口遺跡の事例は土師器生産の様相を考える上で重要である。今後、土手内遺跡に限定せず、広く周辺の集落遺跡との関係を検討していくことが必要であろう。

〈引用・参考文献〉

- 我妻 仁 2000 「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」『宮城考古学』第2号 pp.91~110 宮城県考古学会
- 阿刀田令造 1936 「仙台城下絵図の研究」齊藤報恩会博物館図書部研究報告4
- 岩瀬康治ほか 1980 「三神峯遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第25集
- 岩見和泰ほか 1994 「藤田新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第163集
- 江戸遺跡研究会編 2001 「国説江戸考古学研究事典」柏書房
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1992 「江戸出土陶磁器・土器の諸問題」シンポジウム資料
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1996 「江戸出土陶磁器・土器の諸問題II」シンポジウム資料
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」「国内出土の肥前陶磁」pp.152~157 九州陶磁文化館
- 大橋康二・尾崎葉子 1988 「有田町史 古窯編」有田町教育委員会
- 大橋康二 1993 「肥前陶磁」ニューサイエンス社
- 金森安孝 2004 「仙台城跡第1次調査・石垣修復工事に伴う発掘調査報告書 - 第4分冊石垣図版編」仙台市文化財調査報告書第275集
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 斎藤秀寿 1981 「仙台市金山塚跡出土の古式須恵器」「陣與國官室跡群IV」古窯跡研究会
- 主浜光朗ほか 1992 「十手内」仙台市文化財調査報告書第165集
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡」
- 須藤隆編 1995 「仙台市史特別編2 考古資料」仙台市
- 仙台市教育委員会 1994 「仙台市青葉区文化財分布地図」
- 仙台市教育委員会 1995 「仙台市太白区文化財分布地図」
- 高倉淳ほか編 1994 「絵図・地図で見る仙台」今野印刷
- 次山 淳 1992 「塙釜式土器の変遷とその位置づけ」「究班」埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 pp.235~248
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年 - その1 会津盆地 - 」「東北学院大学論集」歴史学・地理学第26号 pp.105~140
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年 - その2 」「東北学院大学論集」歴史学・地理学第27号 pp.39~88
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大学埋蔵文化財調査年報1」
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1986 「東北大学埋蔵文化財調査年報2」
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大学埋蔵文化財調査年報3」
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 「東北大学埋蔵文化財調査年報4・5」
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大学埋蔵文化財調査年報6」
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 「東北大学埋蔵文化財調査年報7」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 「東北大学埋蔵文化財調査年報8」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報9」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報10」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大学埋蔵文化財調査年報11」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大学埋蔵文化財調査年報12」

- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大学埋蔵文化財調査年報14」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大学埋蔵文化財調査年報15」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大学埋蔵文化財調査年報16」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2002 「東北大学埋蔵文化財調査年報17」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2005 「東北大学埋蔵文化財調査年報18」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 「東北大学埋蔵文化財調査年報19第1分冊」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 「東北大学埋蔵文化財調査年報20」
- 中川久夫 1998 「(2) 遺跡周辺の地質・地形」『東北大学埋蔵文化財調査年報9』 pp. 74~76
- 丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集 pp. 71~213
- 丹羽 茂 1985 「今熊野遺跡I・古代編-」「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚」
宮城県文化財調査報告書第105集 pp.1~142
- 藤沢 敦 1998 「仙台平野における埴輪樹立古墳と外部施設」『東北文化研究室紀要』第39号
pp. 左1~17 東北大学文学部東北文化研究室
- 藤沢敦・松山成男ほか 2003 「P25 大気サブミリPIXEカメラによる仙台城二の丸跡出土漆器の分析」
『日本文化財化学会第20回大会研究発表要旨集』pp.136~137 日本文化財科学会
- 藤沢敦・千葉直美・京野恵子・高木暢亮 2003 「P45 特殊な遺物の取り上げと保存処理」
『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』 pp.176~177 日本文化財科学会
- 藤沢良祐 1998 「瀬戸市史 陶磁史編六」瀬戸市史編纂委員会
- 宮城県教育委員会 1998 「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第176集
- 吉岡一男ほか編 2005 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」今野印刷
- 渡辺泰伸ほか 1974 「富沢遺跡」古窯跡研究会
- 渡辺泰伸ほか 1976 「陸奥国官窯群Ⅱ」古窯跡研究会

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF
TOHOKU UNIVERSITY
vol.21, March 2007

The Archaeological Research Office
On The Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba Ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

On the Campus of Tohoku University, a lot of sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences. Aobayama campus includes Initial Jomon site. In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This volume carries reports of salvage excavations at BK9 on Kawauchi campus, TM6 on Tomizawa campus, which were conducted by the Archaeological Research Center on the Campus, Tohoku University in the fiscal year 2003. This volume includes reports about results of confirmation work with constructions, and activities which were conducted by the Center such as various analyses, conservation work of artifacts, and joint research.

BK9 site (Loc.9 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. the secondary citadel of Sendai Castle)

This excavation was conducted prior to construction of the Kawauchi Hall (student recreational building). The area of excavation was 363.5m². Among the excavations at Kawauchi campus, the present one was a medium-scale excavation.

Because a part of the excavation area was located on the river terrace cliff, the number of discovered archaeological features is limited. As for features in the Edo period, small-scale stone wall, pillared fences, ditches, pits etc. were discovered.

Various implements such as porcelain, ceramics, unglazed ceramics, metal implements, wooden implements, stone implements were excavated from features and soil accumulation. The amount is small although the kind of the implements is variable. These implements are dated to the period between the early 17th century and the middle 19th century.

One vessel of pottery belonging to Jomon Period or Yayoi Period and one haji-ware belonging to Heian era have been excavated. They reveal that the investigated point and the surrounding area was the scene of human activities at those times.

TM6 site (the sixth excavation of Tomizawa Ashinokuchi site)

This area was excavated prior to improvement of the drainpipes at Tomizawa campus. The area of the

excavation was 24.5m². It is a small-scale excavation.

From this narrow excavation area, seven clay mining pits were discovered. Because the haji-ware vessels belonging to the early Kohun Period were excavated from four pits, these clay mining pits were made in the early Kofun Period (the later third and the fourth centuries).

写 真 図 版

図版1～10：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9）

図版11～13：芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）



1. 調査区全景（Ⅲ期、南から）



2. 調査区全景（Ⅲ期、北から）



3. 調査区全景（Ⅲ期、南東から）



4. ピット 6（西から）

図版 1 武家屋敷地区第 9 地点全景・Ⅲ期の遺構
PL1 Views and feature of phase III at BK9

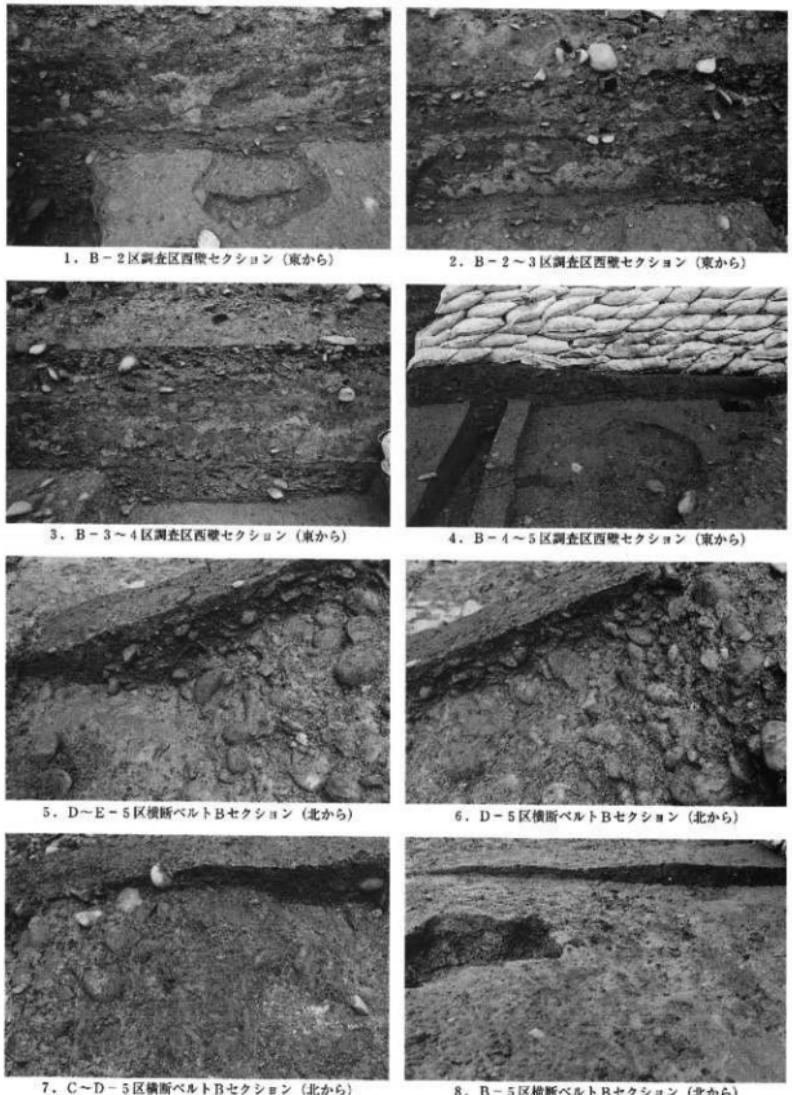


1. 南半部最終状況（I・II期、南から）

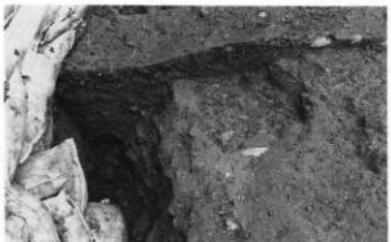


2. 南半部最終状況（I・II期、東から）

図版2 武家屋敷地区第9地点全景（I・II期）
PL2 Views of phase I and II at BK9



図版3 武家屋敷地区第9地点基本層セクション (1)
Pl.3 Cross sections of BK9 (I)



1. B-10区横断ベルトAセクション（南から）



2. B-11区横断ベルトAセクション（南から）



3. B-4区横断ベルトCセクション（南から）



4. B～C-4区横断ベルトCセクション（南から）



5. C-4区横断ベルトCセクション（南から）



6. B-4区横断ベルトDセクション（南から）



7. B～C-4区横断ベルトDセクション（南から）



8. C-4区横断ベルトDセクション（南から）

図版4 武家屋敷地区第9地点基本層セクション(2)
Pl.4 Cross sections of BK9 (2)



1. 石垣全景（東から）

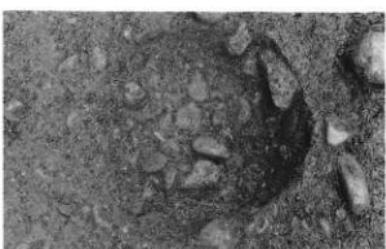


2. 石垣石籬残存部全景（東から）

図版5 武家屋敷地区第9地点I・II期の遺構 (1)
Pl.5 Features of phase I and II at BK9 (1)



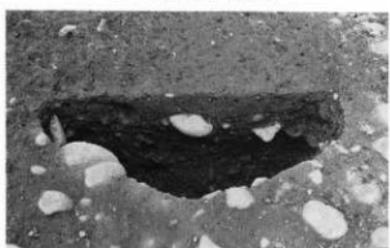
1. 5列以南全景（南から）



2. ピット11（南から）



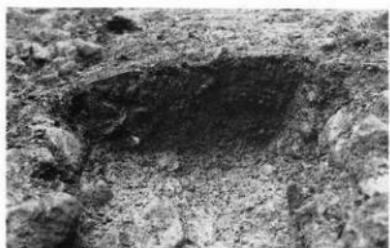
3. ピット12（北から）



4. ピット14セクション（東から）



5. ピット20セクション（東から）



6. 1号溝セクション（北から）



7. 1号溝（北から）

図版6 武家屋敷地区第9地点I・II期の遺構 (2)
Pl.6 Features of phase I and II at BK9 (2)



1. 2号造構・3号造構確認状況（西から）



2. B-3区V層下面の落ち込み（北から）



3. ピット15・ピット16セクション（南から）



4. ピット15・ピット16（南から）



5. ピット17セクション（南から）



6. ピット17（南から）



7. ピット19セクション（西から）



8. ピット19（西から）

図版7 武家屋敷地区第3地点 I・II期の遺構 (3)
Pl.7 Features of phase I and II at BK9 (3)



1. 1号柱列・2号柱列（西から）



2. 1号柱列柱2セクション（北から）



3. 1号柱列柱2（北から）



4. 2号柱列柱2セクション（北から）



5. 1号柱列柱1・2号柱列柱1セクション（北から）



6. 北半部最終状況（東から）

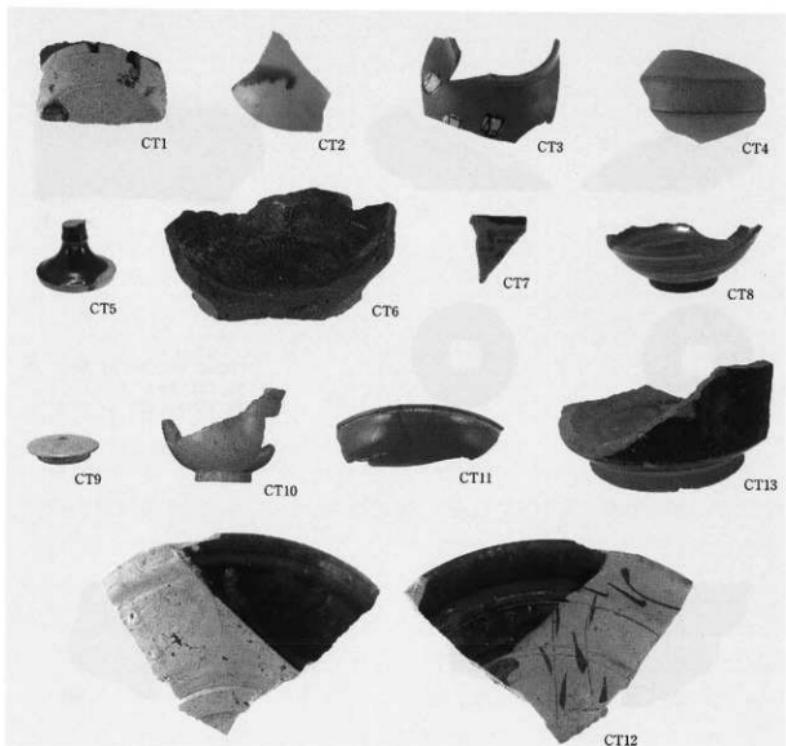
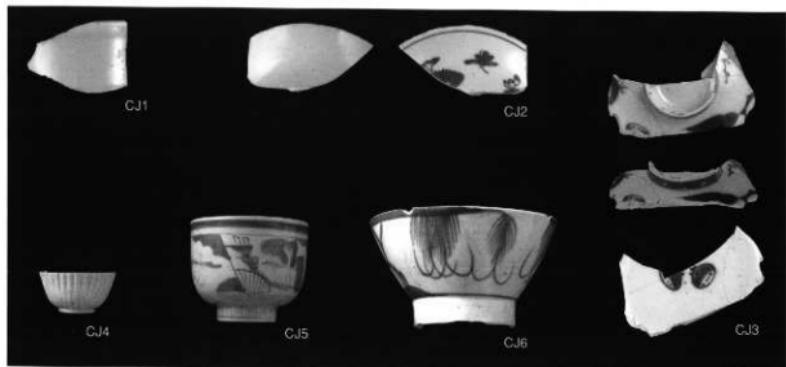


7. ピット1セクション（東から）



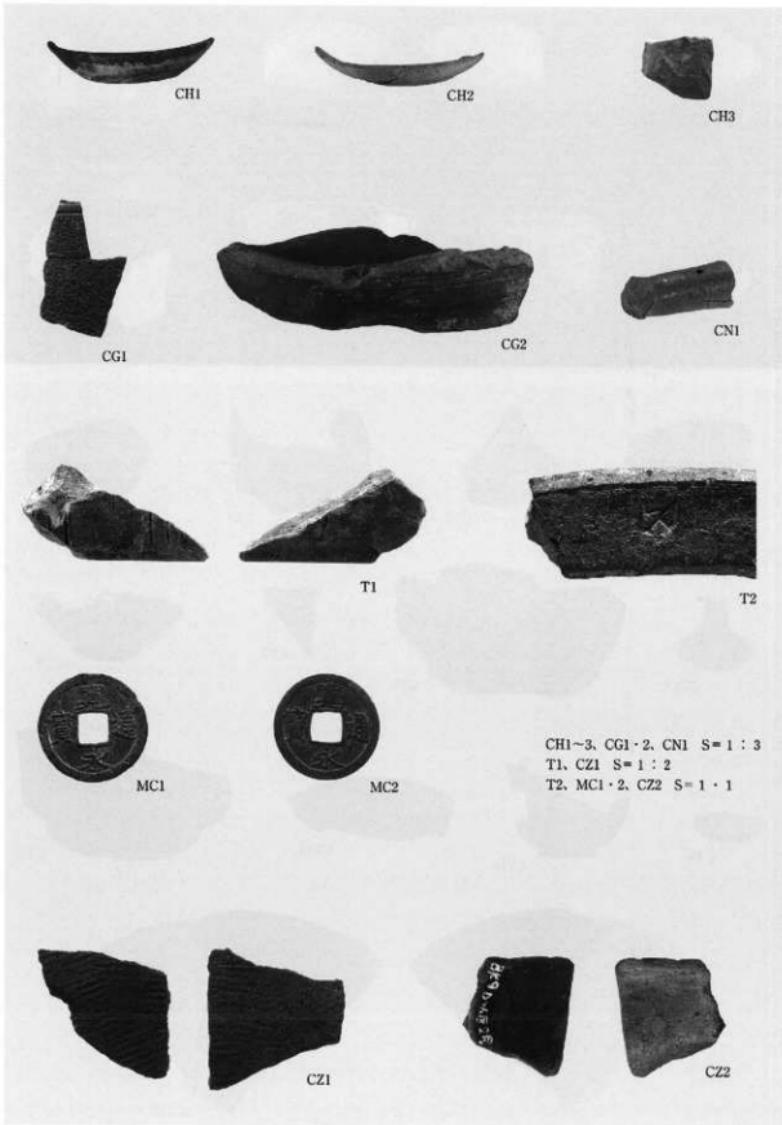
8. 1号造構（南から）

図版8 武家屋敷地区第9地点I・II期の造構(4)
PL8 Features of phase I and II at BK9(4)



图版9 武家屋敷地区第9地点出土遗物 (1)
PL.9 Various implements from BK9 (I)

S = 1 : 3



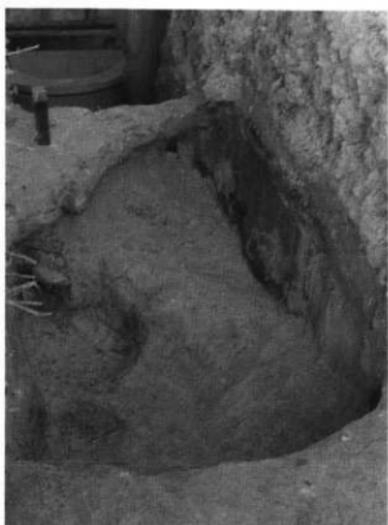
圖版10 武家屋敷地區第9地點出土遺物 (2)
PL.10 Various implements from BK9 (2)



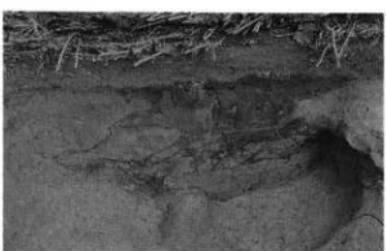
1. 8～11号土坑検出状況（東から）



2. 12～14号土坑検出状況（東から）



3. 8号土坑（東から）



4. 8号土坑セクション（南から）



5. 9号土坑（南から）

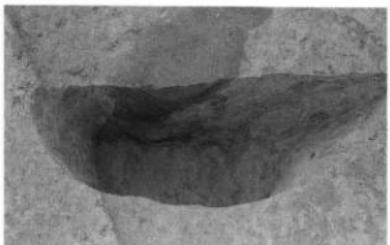
図版11 芦ノ口遺跡第6次調査全景・検出遺構（1）
Pl.11 Views and features of TM6 (I)



1. 10号土坑（南から）



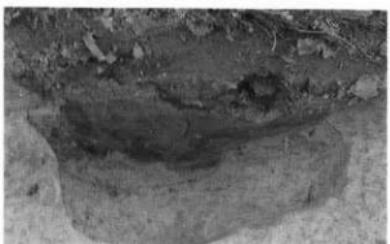
2. 11号土坑（北から）



3. 12号土坑セクション（東から）



4. 12号土坑（東から）



5. 13号土坑（北から）



6. 14号土坑セクション（北から）

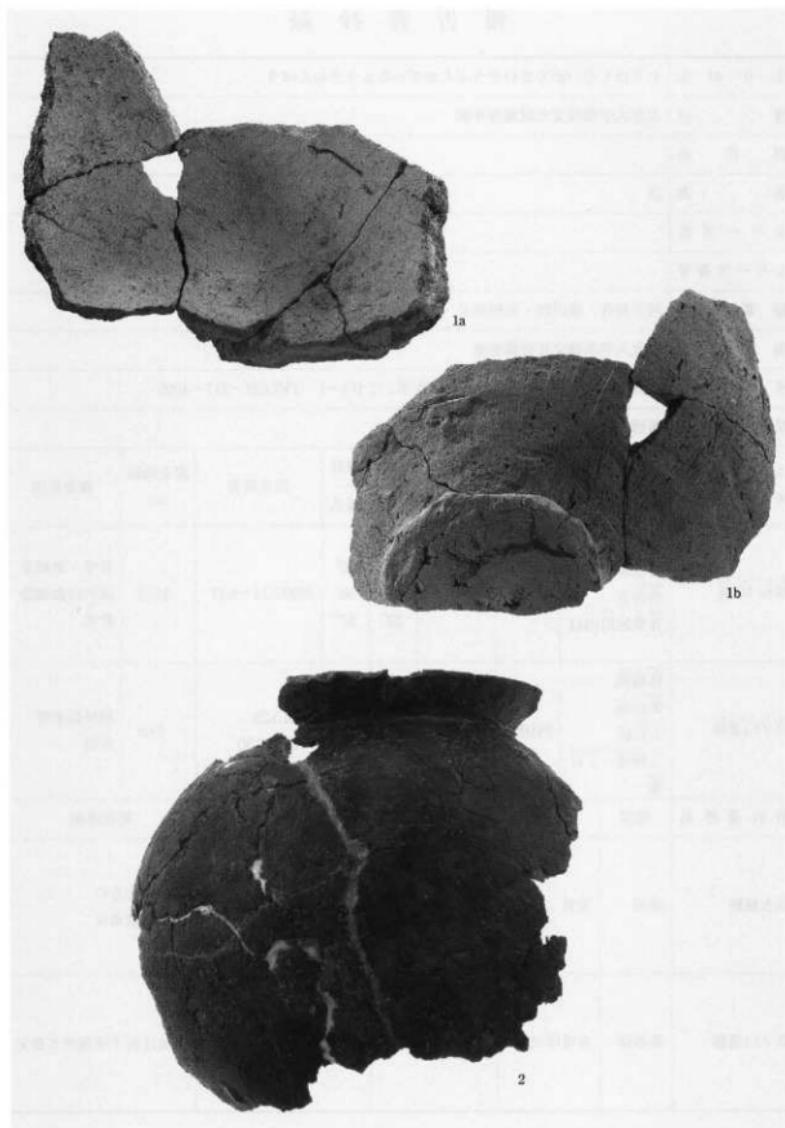


7. 14号土坑遺物出土状況（北から）



8. 14号土坑（東から）

図版12 芦ノ口遺跡第6次調査検出遺構（2）
PL12 Features of TM6 (2)



圖版13 荫ノ口造跡第6次調査出土土師器
PL13 Haji ware from TM6

S = 1 : 2

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう							
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報							
副書名								
卷次	21							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	阿子島香・藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL022-217-4995							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
仙台城跡	宮城県 仙台市 青葉区川内41	04100	01033	38° 15'	140° 50'	2003.7.14~9.17	363.5	音楽・舞踏系 課外活動施設 新築
芦ノ口遺跡	宮城県 仙台市 太白区 神峯一丁目 他	04100	01315	38° 35"	140° 51' 20"	2004.3.25 ~2004.3.30	24.5	屋外排水管 布設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
仙台城跡	城館	近世	掘立柱列・ 石垣・溝・ピット		陶磁器・瓦・金属製品	二の丸北方の 武家屋敷地区		
芦ノ口遺跡	集落跡	古墳時代	土坑		土師器	土坑は粘土探掘坑と推定		

東北大学埋蔵文化財調査年報21

平成19年3月31日

発行 東北大学理藏文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
東北大学生会科学研究所内
TEL 022(217)4995

印刷 株式会社 東北プリント
TEL 022(263)1166
